

第4章 精神薄弱者の職業生活設計支援の課題

第1節 職業生活設計と生活自立の課題

表4-1は、これから職業生活設計を展開しようとする若年者である。30歳未満の若者の場合、就労に関する経歴は必ずしも長いとはいえない。したがって、職業適応のパターンも明確になっていない。調査時点現在の就労状況は表のとおりであり、これからどのような展開をするのかについては予測の範囲を出ない。しかし、年配者の事例の検討を通して得た知見によれば、生活自立に関する経歴は今後の展開に重要な資料を提供するものとなる。

彼らは、精神薄弱者に対する義務教育化が図られた後の学校教育を受けた経験を持っており、職業準備訓練の経験を持つ者もいる。また、発達のみにみれば上昇期にあり、自立を志向する時期である。彼らの経歴からは、若年者に対する職業生活設計支援の課題を明らかにすることができると考えられる。

表では、健康状況、教育歴、勤め先の概要に加え、生活自立に関する経歴、就労に関する経歴、仕事に対する満足度を評価して記述した。評価は調査時点現在（平成6年3月）の一時点のものである。

表4-1 対象者の概要（若年者）

事例	年齢	性	障害程度	健康状況	生活自立		教育歴				勤め先の概要				
					レベル	家族	小学校	中学校	高校	その他	レベル	業種	企業規模	給料	満足
A	24	男	認定されていない	良好	II	父母：行方不明 妹：精神薄弱	普通学級 卒業	特殊学級 卒業	/	職業訓練校 修了	I	製造業	15人	15万円	高
B	20	女	B2	良好	III	両親離婚、姉：保護者 兄：行方不明	5年まで 普通学級	特殊学級 卒業	/	能開センター 修了	II	製造業	100人	12万円	高
C	18	女	B2	良好	III	父：分裂病 母：精神薄弱	3年まで 普通学級	特殊学級 卒業	/	/	II	製造業	30人	8万円	中
D	25	男	B2	良好	III	母：行方不明 継母：死亡	普通学級 卒業	普通学級 卒業	養護学校 高等部卒	/	II	製造業	15人	10万円	低
E	27	男	B1	分裂病(19歳発病) 現在も服薬中	III	母：身体障害2級 父：死亡、兄：精神薄弱	特殊学級 卒業	特殊学級 卒業	/	/	II	製造業	20人	9万円	中
F	19	女	B2	良好	III	母・兄：行方不明	特殊学級 卒業	特殊学級 卒業	養護学校 高等部卒	不登校	II	製造業	15人	8万円	低
G	19	男	B2	てんかん治療 (7～16歳)	III	父：不明 母：精神薄弱	2年まで 普通学級	特殊学級 卒業	養護学校 高等部卒	/	II	製造業	30人	8万円	中
H	22	女	B1	心因性ヒステリー 治療(19歳)	III	母、きょうだい8人： 精神薄弱	普通学級 卒業	普通学級 卒業	/	/	II	製造業	10人	11万円	中
I	28	男	B2	良好	II	父：粗暴・アルコール中毒 母：死亡、兄：保護者	普通学級 卒業	特殊学級 卒業	/	母の死後 不登校	II	製造業	30人	8万円	中
J	23	女	B1	良好	III	父母：死亡 兄：精神薄弱	普通学級 卒業	特殊学級 卒業	/	/	II	製造業	10人	11万円	中

(注) 評価値は、調査時点現在（平成6年3月）で記入したものである

障害程度は手帳に記載された等級による：A2＝重度、B1＝中度、B2＝軽度

満足度の評価：高＝「満足」が14項目中10項目以上、中＝「満足」が14項目中5～9項目、低＝「満足」が14項目中4項目以下

なお、事例を詳解するに際し、もっぱら本人の発言をできるだけ忠実に再現することに努め、援助者の観察を加えて客観的に記述することを試みた。さらに、経歴評価を加えて職業リハビリテーションのステップを明らかにすることを課題としている。

第2節 職業生活設計支援の概要

—— 若年者の事例から ——

1. 学校卒業後、職業訓練を受けて入職した事例から

1-1 職業訓練校を卒業したA氏の事例

(1) A氏のプロフィール

昭和44年の生まれで現在24歳の男性。重複障害はない。また、現在まで健康上の問題はない。知能検査の結果はIQ 69。話し方はゆっくりであるが、語彙は豊富である。

母親は本人14歳の時に、父親は15歳の時に家出により行方不明になっている。3人きょうだいの第1子で、妹が2人いるが、3歳年下の妹は看護見習いで病院に住み込み、5歳年下の妹は精神薄弱者児童施設に入所している。きょうだいで一緒に生活したいという希望はあるが実現していない。

現在、電車で1時間の会社（従業員15人）に通勤している。一般求人で正規に雇用されており、固定給制で月額15万円を得ている。また、障害基礎年金（2級）も支給されている。居所はグループホーム。

(2) 就労に関する経歴について

小学校特殊学級に2年生まで在籍、県外施設へ入所するための転居にともない普通学級に編入したが、遅れのために卒業は15歳であった。中学校は特殊学級を3年間で卒業した。19歳で職業訓練校金属工作科を修了後、訓練校からの紹介で就職した。給料は月額100,000円であったが、転居にともなって2年で退職、現在の会社に転職した。

現在の仕事は、職業安定所の紹介による。「コンピュータの制御盤の部品の配線、シーケンスの図面を見て……（大手電気）会社の下請け……図面の読み方は会社で教えてもらった、圧着機を使いますから、前の仕事とは違います、主に配線チェックの方をやっています、図面を見ながら回路が作動するのかどうか」という説明は淀みがない。仕事の面白さは毎回違った盤を扱うという新奇性にあるという。「普通の仕事は同じものですから……（この仕事は一つずつ違う）……検査もシーケンスといったらコンピュータみたいなのがある」など、好奇心も旺盛である。勤めて4年の現在であるが、振り返ると入職後1～2年で一人前になったという自己評価である。

A氏本人は「注意されたりすることはない」という説明をしているが、指導員の見方は異なっており、会社側からすると問題がないわけではないという。批判の第一は、周囲への気遣いに欠ける点である。通勤送迎バスが8:30スタートのところを29分に乘る。遅れるわけではないが、他の従業員を待たせる

ことになるのに対し、「8時半に出るんだからいい」と主張する。会社側は「早く来て待っている姿勢が欲しい」のである。批判の第二は、コミュニケーション・スキルが身につけていない点である。会社には「仕事をしに行っているのだから、挨拶や返事は仕事ではない」と主張する。仕事は好きであるから、時間がきたら自分で（勝手に）仕事を始め、時間で終わる。しかし、休憩時間に集まっても職員の輪の中に入るわけではなく、仕事をやっているかポツンとつたっているかのどちらかである。15人しかいない職員の「和」を乱すところが目立ってしまうというのである。

寮では挨拶をするが、A氏にすれば「職場でもしている」と言う。しかし、どうやら会社では聞こえないくらいの小さい声で言っているらしい。相手からも挨拶をもらうという「挨拶のセット」とは考えていないという。こうした状況ではあるが、周囲が一般従業員とみて苦情を言っており、一般雇用により期待される標準を大きく逸脱しない生産性をあげているところから、「就労レベルⅠ」とした。

A氏の仕事に対する満足の状態について、指導員の評価によれば、「他者承認」や「会社の経営方針」「会社の将来性」「昇進の可能性」には満足していないが、それ以外の「上司」や「給料」「仕事の責任」「仕事に対する興味」「進歩の機会」「能力を試す」「アイデアを生かす」「労働条件」「通勤条件」「休暇」といった項目には概ね満足しているという。

表 4-2 仕事に対する満足の状況

	上司	給料	他者承認	仕事の責任	仕事に対する興味	進歩の機会	能力を試す	アイデアを生かす	会社の経営方針	会社の将来性	昇進の可能性	労働条件	通勤条件	休暇
製造	○	○		○	○	○	○	○				○	○	○

仕事はできることから、周囲に「あいつは、そういうやつなんだ」というような“割り切り”があれば、現在の仕事を継続できるかもしれないという見通しは立っているとみてよいだろう。

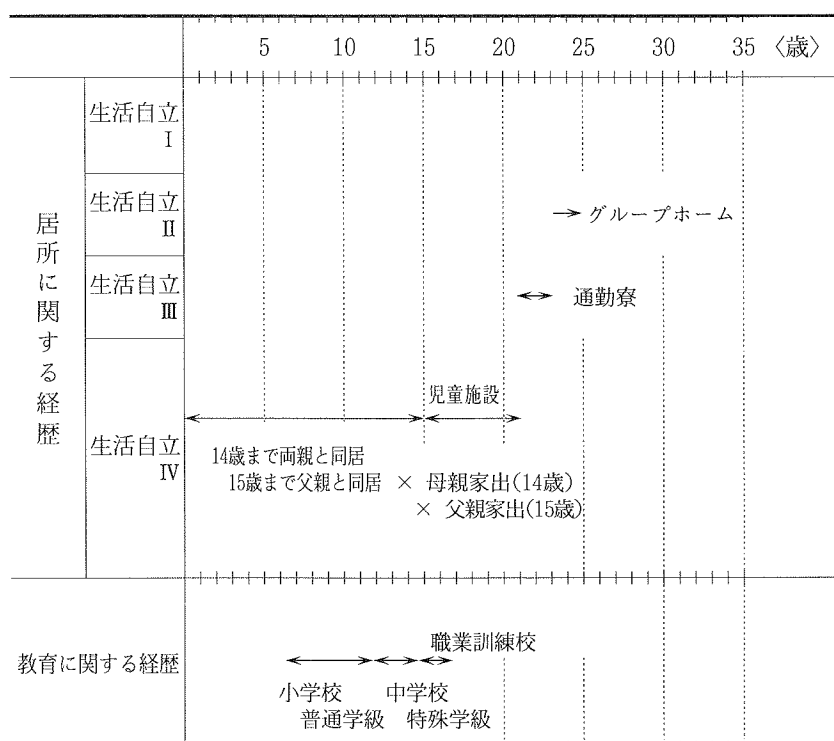
(3) 居所に関する経歴について

8人きょうだいであるというが、居所がわかっているのは妹2人のみである。親が行方不明になったことから施設に措置された。この時期までは「生活自立Ⅳ」である。その後、児童相談所の紹介で通寮寮に入所することになり、「生活自立Ⅲ」を達成し、現在はグループホームで「生活自立Ⅱ」を達成している。

身の回りのことなど、基本的な生活習慣は確立しており、寮でも自治会の副会長としての役割を担っている。ワープロソフトを持っていることから、話し合いのまとめを文書化するなどは好んで取り組む。

しかし、まとめるのは文章だけであり、対人関係のまとめはできない。パソコンに興味があり、見本市にはよく出かけるが、誰かと一緒に行くと「自分が思うようにできないから嫌だ」という背景には、対人関係調整に不得手であるという自己理解がある。「つれて行けば、気を使わなければならない」がそうするとパニックになり自分の興味関心どころではないということのようである。こういうA氏に対し、寮の他の利用者がリーダーとしてA氏をみているということはない。しかし、A氏自身は寮のグループ行事にほとんど参加しており、人についていくことには関心があるものと思われる。

図 4-1 A氏の経歴



父親はドヤに居り、金の無心をすることから没交渉となっているのが現状である。妹たちとは一緒に住んでみたいという希望がある。結婚の希望はあるが、「男が女の話をするのは、はしたない」という意識が強く、「……………いまんとは、いないんです……………」という説明であった。

(4) 経歴が示唆すること

職業訓練校では、一般の金属工作科を修了している。「電気関係を探したんですけど、場所が遠かったもんですから」という状況で第一希望はかなわなかったが、「通信教育で電子工学の講座もあったので、それもやっていた」という。「資格は一応、アーク溶接とガス溶接の方を……………でも、もう3年も使っていない……………今はそれを違う方面の仕事をしていますから……………」と学んだことを生かしていないことを説明していた。つまり、「就労レベルⅠ」の前に準備段階の「就労レベルⅣ」があったことになる。

初職は訓練校からの紹介で「ハイブリッドICという、カメラの中の部品……………半田付け」であったが、

「戻るのをやめた（児童施設から通勤寮への移動に伴う転居）……二十歳を過ぎたから……」という説明で、職務ないし職場への不応は問題にならなかったといえる。

生活自立の状況についてみると、家賃は 20,000円、必要経費はしかたなく支出しているという意識である。欲しいものにはお金を使うが、コンピュータ関係に偏っている。「80万のコンピュータを8万で買った」となると、金銭感覚は現実的ではない。購買意欲の実態はサークル機関誌の広告を見て刺激された結果であり、「これを買えば、この景品がつきます」というと景品を目当てに買うことが続いている。要不要ではなく「おまけ」が欲しくて買ってしまうところに計画性は認められない。

趣味はコンピュータではなく、ゲームである。できる範囲はせまいが、「こんなにできる」と思いこんでいる面がある。ワープロで手紙を書くといっても、一つの手紙に1ヶ月以上かかるのが実状である。精神薄弱者にはできないと思いきこんでいる人は過大評価をするが、本人は、その過大評価がうれしいのである。コンピュータを持っていることが誇りであり、表計算ソフトも持っている。しかし、ソフトを使っているわけではなく、それでこづかい帳をつけてようと考えているわけでもないことに注目しなければならない。

A氏の場合、指導員がみる大人らしくなった年齢は20歳である。これは働き盛りの始まる年齢と対応しており、通勤寮入所が契機となっている。精神的にまた経済的に自立した年齢は21歳で、同時にこの仕事でやって行けるという目処も立っている。

しかし、指導員の評価では、職業人として一人前の年齢はこれからであると見られており、すでに一人前だと考えるA氏の意識とは異なっている。A氏への要求水準は高く、将来的に達成してほしいという期待があるのかもしれない。

（5）サポート・ネットワークの課題

① 将来の展望について

指導員によれば、不況でも電子関係は影響されないという見込みから、職業生活に関しては現職に安定して継続するものとみている。A氏の場合、一般求人職で入社しており、通常の昇給ベースで上がっていくことが予定されている。現在のところ、仕事に対する構えにはとかくの批判はあるが、達成水準では問題がなく、「あいつはそういう奴だ」という見方を周囲が受け入れることを待っている状況である。しかし、定着できたとしても、昇給ベースを同等に扱うのかについて、また、昇進のポストを用意できるのかについて、将来的に問題が起こるかもしれない。

給料は「残業して 17～8万くらい」、こづかいは「26,000円、1月分」というところまでは明解であるが、寮費は「…………… 2万くらいかな」、食費は「……………その辺は先生方がやってくれる」、給料から天引きされているものは「……………厚生年金とか……………」、貯金は「……………」と、ほとんど関心がない。余暇には関心があるが、その財源については考えていないのが現実である。

個人生活について、指導員は単身アパート生活の可能性は十分あるとみている。問題はコンピュータに対する過剰投資と職場での対人関係の調整のみであるという。単身生活への希望は持っており、「洗

濯とかは自分でできます……帰りが遅いときは朝洗濯しています……将来はホームを出て……」という状況ではあるが、調理ができないために食事の問題が自立達成の課題となっている。

② 余暇の使い方について

余暇についてはパソコン一辺倒である。「MSXって、一般家庭用のメーカーから出ているんです、知っていますか」「ゲームとか表計算とか……表計算は家計簿のソフトを……でもまだ……完全には……その他には音楽関係で、キーボードが楽器の代わりになります」「ゲームは2、3種類、あとは体験盤があります」という説明からは、A氏が十分に情報に通じていることがわかる。

休みの日は「月に1回は遠くまで行きます、東京とか、千葉、幕張メッセまで……たいがい、ひとりです」という行き先は、パソコンの見本市等である。しかし、機器や情報を持っていることとそれを使うこととの間には大きなズレがあり、A氏はそれを意識していない。こうした現実を受け入れることを迫られるときに、併せて障害の受容を迫られることが予測される。

③ 自己理解について

人とのつきあい方で注意されたりすることは「……」、ほめられたりすることは「……」となり、周囲の評価には無頓着であることがわかる。

俗に、パソコン少年のパーソナリティとされる特性を備えているというのが指導員の評価である。そこで、「女の子には興味がなくて、人から話しかけられてもあんまりシャキシャキ返事しなくて、話をするのは好きじゃなくて、ゲームやってることが好きで、どっちかという自分一人の世界に閉じ込める……っていわれているけれど、そういうことはありませんか？」と聞いてみたが、「……そういうことはないです」とかわされてしまった。

学習意欲は旺盛で、パソコンのプログラムについて通信教育を受けた経験があり、「基本的なことは把握していないので……またやるかもしれない」という意識である。

こうした自己理解は、今後、修正を余儀なくされることが予測される。というのは、一般求人枠での採用であれば、同期の人と比較すると昇進が遅い、不本意なポストについている、上司は理解してくれない、同僚は理解してくれない、給与やボーナスが低く査定された、自分の仕事に他の人が干渉してくる、などのことに対処する場面が今後おこってくるものと思われるからである。こうした場面での指導・援助が必要となるであろう。

1-2 職業訓練機関を卒業したBさんの事例

(1) Bさんのプロフィール

昭和50年の生まれで現在20歳の女性。重複障害はない。また、現在まで健康上の問題はない。知能検査の結果はIQ 62。立て板に水という話し方で、語彙は豊富である。

父親は居所を転々としており、月1回程度面会に訪れる関係、母親とは本人11歳の時に離婚している。4人きょうだいの第4子で、兄2人は居所不明、1歳年上の姉が実質的な保護者になっている。

現在、電車で1時間半の会社（従業員100人、障害者3人）に通勤している。正規に雇用されており、固定給制で月額12万円を得ている。居所は通勤寮。目下の関心事は交遊関係、特に異性との交遊に夢中であり、デートのために、インタビューの日程調整が困難な状況であった。

（2）就労に関する経歴について

小学校5年生までは普通学級、6年生以降、中学校卒業までは特殊学級で、教育を受ける。中学校卒業後、精神薄弱者能力開発センター電気機器組立科で2年間の職業訓練を受け、センターでの実習先に就職し、現在にいたる。実習時代は「就労レベルⅣ」であり、現在は「就労レベルⅡ」を達成している。

仕事の内容は、本人によれば「大手化粧品メーカーのコンパクトを作っている……コンパクトを開けますと鏡がついてますね、それを磨いたり……うちが作っているのは容器だけ……」であり、訓練内容とは直接の関連のない仕事である。職業選択に際しては、「ほんとは3件あったんですけど、1件は年がまだ17才で……18才だったらいいって……もう1件の方は年とかは関係なかったんですけど、先生が“向こうの人があんまり受け入れようとしてくれない”って……訓練は電気関係だったので……今ついている仕事は関係なくて……やっと見つかったとこだから……」と明解であるが、あくまでも希望は訓練で身につけたことを生かす仕事に就くことであるという。

その訓練内容とは、「電気部品の組立と半田ごてを使って半田付けしたり、コードを切ったり……」と好きな仕事であったことを強調する。今の仕事は「あまり好きじゃないけど、やっと3年目に入ったから……がんばろうかなあと……だんだん面白くなってきたけど気持ちの方が揺れていて……」と説明する。

訓練センター時代の同級生は訓練コースと同じ職種に就職している人が多いことから、自分だけはずれたという意識が強い。したがって、「（友だちと会うと）愚痴をいう方が多いんです」ということになる。通勤時間が長いことも負担になっている。

実習と仕事との違いについて、「実習生の時は班長がやさしかったんですけど、今は怒られる……ちょっと失敗しただけで、“何やってんのよ、あんた”って感じで……チームは18人、今、うちのところは頼まれているのが多くて納入に間に合わない大変だから……」と仕事の厳しさを説明する。職場での苦労は人間関係であり、「友だちもやめた人がいる……人間関係がうまくいなくて……」と自分に引き寄せて考えることはできる。いずれにせよ、「実習のときのことは役に立っているとは思えない」というのがBさんの正直な感想で、「もう少し厳しくしてもらった方がいい」と当時の評価があいまいだったことを指摘する。しかし、実際には「今やっているような難しいことをやらせてもらわなかった」ためであるということも、Bさん自身が承知している。職場の評価では、実習の場合「まあまあできれば100点」に対し、正規に雇う場合には「まあまあでは40～50点に過ぎない」という事業所であり、実習のあり方に対する問題が示唆される。

人間関係で上司に注意を受けていることは、面白くないときに顔に出してしまうことである。「3年間で給料上がった、残業とかもついているから」というが、これからについては、「わかんない、班長の好

みつつうのがあるから……かわいがっている子とかの方が有利……いろいろとあるんだ……でも、班長に好かれてた方がいいって」と関係の難しさを指摘する。しかし、かわいがられてはいないことを説明する時に、人間関係のルールを守っていない上司を批判する。つまり、「みんなは“ちゃんづけ”なんですよ、でも私だけは〇〇〇（名前を呼び捨て）って……（私と）同じ年の人には名字に“さんづけ”……よくわかんないんですよ……その人と仕事のレベルは同じくらいだから、それが（心に）引っかかって……」という不満には一応の筋が通っている。

友だちという方が楽しいとしながらも、「不景気だつつうのがあるから、やっぱ、今の仕事でがんばった方がいいかなと」と言い聞かせるような調子であった。今、努力していることは「班長とかに、“落ちつきがないよ”って言われるから、それを気をつけないと」と、指導員の援助を受けて努力目標は明確である。

Bさんの仕事に対する満足の状況について、指導員の評価によれば、「仕事の責任」や「昇進の可能性」「通勤条件」には満足していないが、「上司」や「給料」「他者承認」「仕事に対する興味」「進歩の機会」「能力を試す」「アイデアを生かす」「会社の経営方針」「会社の将来性」「労働条件」「休暇」といった項目には概ね満足しているという。

表 4-3 仕事に対する満足の状況

	上司	給料	他者承認	仕事の責任	仕事に対する興味	進歩の機会	能力を試す	アイデアを生かす	会社の経営方針	会社の将来性	昇進の可能性	労働条件	通勤条件	休暇
製造	○	○	○		○	○	○	○	○	○		○		○

Bさん自身が主張する不満は「1回しか教えてくれない……まだ、覚えてないのに“やってみな”とかいう……」,「みんなと同じような（名前の）呼び方をして欲しい, やだし, 気を使って欲しい」ということであり, 障害に対して配慮を求めながら処遇は同等であることを願っており, 援助があれば同じようにできるという主張となっている。その他に「休み時間はもうちょい長くして欲しい……2時間で5分……」と仕事疲れがあることを主張している。

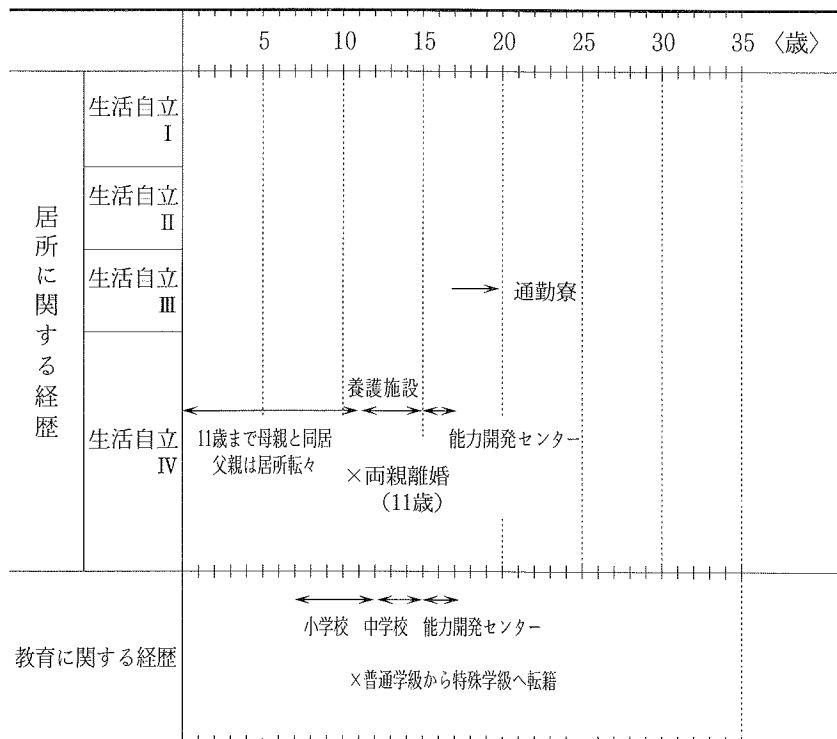
(3) 居所に関する経歴について

11歳までは両親と同居をしていたが, 両親の離婚にともない, 養護施設に入所する。この時点で父親は居所を転々とするようになっていく。この施設が健常児童のための養護施設であったために, “おいてきぼり”の扱いを受けることになった。生活自立をめざすこの時期は「生活自立IV」であった。しか

し、知的に遅れのある中では能力的に高かったために、通勤寮での援助を得て、2年間たらずの間に落ちつくことができ、「生活自立Ⅲ」を達成した。

通勤寮の生活については、「厳しい、お父さんと住んでる時には時間とか別に気にしなくてよかったんだけど……10時くらいでも何も言われなかったんだけど……時間守んなさいって……毎日かけてたら身体が持たないからって、あんまり外出とかできなくて……」という不満が大きい。訓練センター時代は初めて対等につきあえる友人ができて自信を持てた経験があり、生まれて初めてのびのびと生活し、全能感を実感できたに違いない。その直後であるだけに、ルールを守ることはきわめて拘束感の強いものであったことは想像に難くない。「寮長先生には反発できないんです。ちょっとこわいかなって」という背景には、通勤寮に来て初めて生活規律をしつけられた実感がこめられている。

図 4-2 Bさんの経歴



相談する人の第一は「おねえちゃん」であるという。姉の住まいに同居すれば通勤時間は短くてすむが、姉自身に結婚の話があること、1歳年上の姉には保護者の役は務まらないことなどから、姉が相談相手になるということは、現実的ではないといわざるをえない。

(4) 経歴が示唆すること

Bさんにとって、自信を持って対等につきあえる仲間との関係はかけがえのないものであったといえる。しかし、その仲間に対する周囲の評価は、必ずしもよいものとはいえない。姉によれば、生活面で影響されて悪い方向にいったということになる。端的にいえば、「私の言うことを全く聞かなくなった、

えらそうにいう……できないのに“できる”という、失敗しても懲りずにチャレンジするというのではなく、すなおでない、(私に)“うるさい”と言い、指示をされるのを嫌うようになった」という状況である。

職場では、実習の時には「できたはず」なのに「できなくなった」という評価である。過剰な自信に対し、善悪の判断が曖昧であると、行動規制がきかなくなるという典型である。班長から言われたりすることは、「うるさいなあって感じで……」という表現にそれが表われている。

Bさんの場合、指導員が「大人っぽくなった」とみる年齢は16歳である。これは俗にいう“世間ズレ”した振る舞いができることをさしている。しかし、基本的な生活習慣が身につけて経済的にも自立し、働き盛りに入るのは18歳と見ている。つまり、職業人として一人前の年齢はこれからであると見られており、本人の意識と指導員の評価とはこの点では一致している。Bさん自身が一人前になる年齢としてあげるのは20歳くらいであり、だんだん大人になったということを感じられたのは仕事についてのことだという。

「今の職場の班長は50いくつだけ代行さんは27歳」であり、仕事さえ速かったらBさん自身も「代行」くらいにはなれると思っている。「ひそかにめざしている」というのが本音である。成長の足跡を見ながら目標を立てるという考え方は身につけているといえよう。

(5) サポートネットワークの課題

① 訓練機関と生活援護施設との関係調整

Bさんの場合、あくまでも電気関係の職場にこだわっており、通勤時間が長いこともあって実習先に就職することには難色を示していたという。選択は訓練機関の指導で進められたが、決定は実習先の実績に基づく関係と労働市場の状況とによっている。Bさんの言葉を借りれば、「不景気だから……」となるが、現職に定着した背景には、指導員が週に2～3回の職場訪問を行いながら、1年目の意欲のなさや対人関係の問題を乗り越えたことがあげられる。訓練機関は追指導を行う。一方、居所では生活援助機関としての生活指導を行う。この指導が連携していない場合、利用者本人は自分の都合のよいように振る舞うことになる。これは、往々にして混乱を来すことになる。職場にしてみれば、いずれの機関に問題の調整を相談すればよいのかについて戸惑うことになる。この事例からは、関係機関の関係調整の問題が提起されている。

② 友人や異性との問題

Bさんの目下の関心事は「恋人宣言をしたい」ということにある。これはBさんが先方の家族と会って、つきあいを認められたことを受けている。しかし、つきあっている相手が20人くらいで、一番多くつきあっているのが3人、二番目に多くつきあっているのが5人、恋人宣言はその中の一人ということを引き、つきあい方でもめるのは時間の問題と思われる。現実には、大勢とのつきあいを周りの仲間が“ちくって”相手の知るところとなり、大騒ぎとなった経験をしている。指導員の観察によれば、知的障害のボーダー層の仲間同士の話は、ウソも真実も入り交じって混沌となることがあり、Bさんの場合

には相手に拒絶され、泣いてわめいて、相手に「悪かった」と謝るまでに半年悩んだ経緯がある。

こうした関係調整の援助を求めたのが前述の「寮長先生」だったこともあって、反発できない存在を認めることになったに違いない。こうした援助を受けて自己理解を深めた結果、「結婚は今はできない（数年後には……）、通勤寮であと1年頑張る」に言えるようになっている。目下の課題は、「頑張る」ことの具体的な目標設定に対する援助であろう。

③ 生活自立への方策

「結婚」のために準備段階としてグループホームに移行することを希望するという考えはまだないが、通勤寮での生活は3年を目安としており、「やっぱ、こっからでて、一人暮らしを……」という希望は持っている。しかし、その準備に何が必要であるかについては、「やっぱ、洗濯機とか……」という状況であり、必要経費についても「食費とかあるから20万くらい」「アパート代はわからない」と具体的にはなっていない。こづかいは月単位で30,000円であるが、日曜日の度に遊びに行けば足りなくなる。編み物やテニスにも費用がかかる。目下の生活の充実に手いっぱいであり、将来的な経済的な自立のための援助が必要になるといえよう。

これから起こりそうな出来事について、Bさんによれば「仕事をできれば、かわって」「アパート生活をして」「おねえちゃんと一緒に住みたい」「いつかは結婚しようと、できれば23くらいで……」と選択肢は多いが、その可能性は具体的には見積もられていない。

2. 就労の継続に問題を持つ事例から

2-1 異性への関心の強いCさんの事例

(1) Cさんのプロフィール

昭和50年の生まれで現在18歳の女性。重複障害はない。また、現在まで健康上の問題はない。知能検査の結果はIQ 50。話し方はゆっくりである。発音は不明瞭で、脈絡がとりづらい。

父親は分裂症、母親は中度の精神薄弱で、両親に養育能力がない。2人きょうだいの第1子。両親は娘の居所に関心がないために、祖父母が保護者となっている。弟に障害はなく両親と同居、中学校在学中。

現在、バスで1時間の会社（従業員30人、障害者1人）に通勤している。正規に雇用されており、日給月給制で月額8万円を得ている。居所は通勤寮。

(2) 就労に関する経歴について

小学校3年までは普通学級に在籍したが、精神薄弱者児童施設入所を契機に特殊学級に編入し、中学校卒業まで特殊学級に在籍している。中学校終了後、老人ホームの手伝いをしていた。そこではかわいがられたが、給料が少なかったために就職先を別に探すこととなった。洋菓子製造業への就職はCさん自身の希望であった。「就労レベルⅢ」から「就労レベルⅡ」への移行である。

仕事の内容は、Cさんによれば「スポンジケーキを……鉄板の中のまあいいヤツを……紙をひいて、それで、紙の下にまあいいでっかいやつをひいて、手ヶケがしたの、こことこ、こういうふうにするの、バナナケーキみたいな、こんなの、まあいい細い形したの、並べて、社員たちが生地とか作って……」という説明で、思いつくままに印象の強い出来事を挿入するために工程がわかりにくいのが、作業の補助をしているのが実状である。

仕事の上でCさんが気をつけていることは、「やっぱし、髪の毛がはいんないようにする、だからね、こういうのやってる、ネットかぶって、帽子かぶって、食堂にいても帽子かぶんの、厳しい、あそこは本物だから、社長さんも二人いるし、課長さんもいるし、部長さんもいるし、パートさんもいるし、社員もいる、本物……」と会社に対して誇りを持っていることを主張する。

一方、仕事は好きであるが、周囲との人間関係は必ずしもうまくはっていないと言う。「いじめる人がいて、口でいうの、速くやれとか……女の人……年上……40才……〇〇さん」という状況であるが、「今、男の子がいる、友だち……守ってくれる人がいる……△△君」であり、人に対する好き嫌いの感情ははっきりしている。仕事に対する意欲はあるが、目下の関心事は△△君である。「結婚したい」という気持ちを持っているが、彼には結婚を予定している相手がいる。そこで、自分より年下の別の相手が登場するのであるが、結婚の対象といいながら弟のような存在であり、判然としていない。

Cさんの仕事に対する満足の状況について、指導員の評価によれば、「給料」や「アイデアを生かす」「会社の経営方針」「会社の将来性」「昇進の可能性」「休暇」には満足していないが、「上司」や「他者承認」「仕事の責任」「仕事に対する興味」「進歩の機会」「能力を試す」「アイデアを生かす」「会社の経営方針」「会社の将来性」「昇進の可能性」「労働条件」「通勤条件」といった項目には概ね満足しているという。

表 4-4 仕事に対する満足の状況

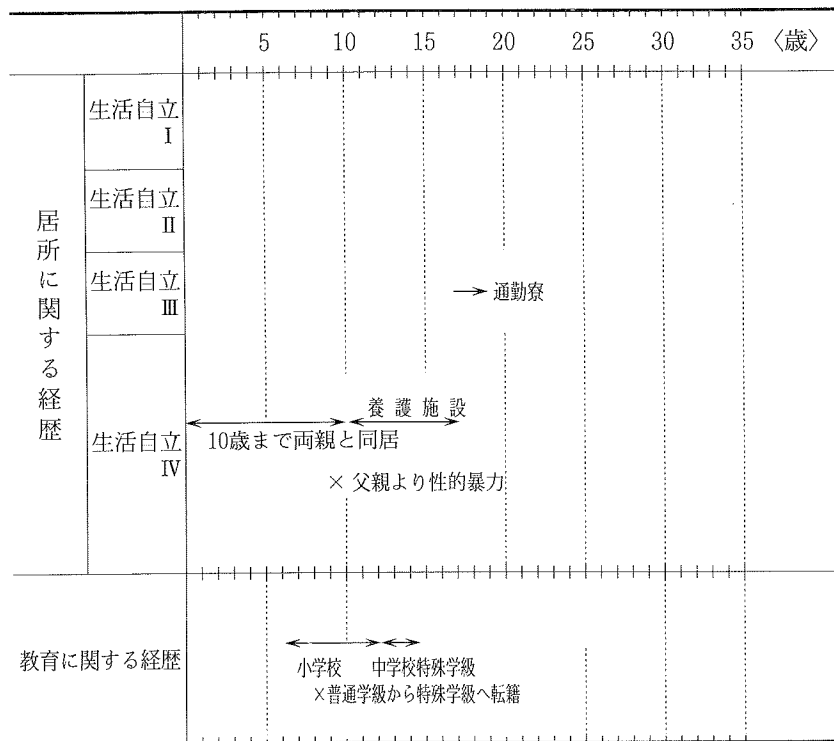
	上司	給料	他者承認	仕事の責任	仕事に対する興味	進歩の機会	能力を試す	アイデアを生かす	会社の経営方針	会社の将来性	昇進の可能性	労働条件	通勤条件	休暇
パン製造	○		○	○	○	○	○					○	○	

(3) 居所に関する経歴について

9歳で精神薄弱者児童施設入所した背景には、父親による性的暴力がある。父親が暴力的であったのか、暴力に性的行為が加わっていたのかは定かではない。小学校の担任が様子がおかしいことに気づき、警察と児童相談所が間に入ることとなった。その際、父親は否定したため本人と父親の説明は一致しなかったという。しかし、以後、親子の接触はない。「お父さんが暴力をふるうから一緒に暮らしてない

の」「お父さんが捨てちゃったの、ゴミに……あたしのこと……ゴミに……わたしを捨てたの……子どもなのに……赤ちゃんなのに……うるさいから……おばあちゃんにきいたの……」という受けとめ方である。

図 4-3 Cさんの経歴



こうした事件との関係は明らかではないが、性に対する関心は非常に高く、「父親だから嫌で、父親でなければいい」という説明からみると、被害者意識はほとんどない。ゆめと現実の境があいまいであり、恥ずかしがることもなく「セックスをした」というが実際には願望に過ぎない。1回会っただけの人に対して「結婚する」と言うが、恋人が欲しいということを示しているらしい。

このような家庭での生活では、自立をめざすという状況であったとはいいがたい。養護学校でも、こうした経験を引かずっていたようであり、「生活自立IV」のレベルであった。

祖父母は孫の障害を信じたくないという意識が強く、家事はできると評価していることから「この子はちゃんと結婚だってできる」と主張するという。家事の能力は片付け程度ができるに過ぎず、掃除、洗濯も援助がないとうまくできないのが実状であるが、甘やかして育てている関係で基準が甘くなっていることは否めない。現在、週末の帰宅先は祖父母宅になっている。

通勤寮へ移行して「生活自立III」を達成したが、まだグループホーム生活を展望できる段階ではないという。

(4) 経歴が示唆すること

Cさんにとって、両親との関係、特に父親との関係がその後の人間関係に大きな影響を与えているものと思われる。極端な例としては、性に関する話題でない会話を持たないという状況であり、「会社でおしりを触られた」と実際には起こっていないことを訴えることもあったという。

性に関しては確かに早熟であるが、仕事面でも仕事以外の場面でも、交遊問題ではなく生活スタイルに関する規範の内面化が重要になっている。興味・関心のあることに対しては、指導・援助の成果が期待できる。目下の関心事は「彼氏」と「着るもの」であることから、指導員の援助によりCさんが立てた現在の目標は、つきあい方を考えることと出勤時の身だしなみを整えることであるという。整容は基礎的な身辺自立の課題である。写真を使って洋服とスカートとコートの組み合わせを選ぶこと、きちんと着ること、などを練習している。Cさん自身は「洋服、だらしがないから……写真とか持ってるから……自分でも持ってる……決めた洋服着なさいって……家から持ってきたらダメだって……」と要領を得ないながらも目標とする課題を掲げることができる。彼女自身があげる「整容」の次の課題は「タンスの整理」、その後は「こづかいチェック」であるという。

好きだといっている相手からの指導性は期待できないことから、異性との交友問題で歯止めが利かなくなるおそれがあるという現状である。また、孫かわいさのあまり物を買って与えたりこづかいを与えて指導目標を崩してしまうことから、家庭との連携のあり方が問題となっている。

Cさんの場合、指導員が「大人っぽくなった」とみる年齢は15歳である。これは性的な関心の高まりに引きずられている。また、職業人として振る舞うことができる年齢、並びに働き盛りの始まりの年齢は17歳からとみられており、通勤寮入所が契機となっている。働く意欲や作業態度についてはほとんど問題なくなっているが、精神的にまた経済的に自立する年齢の目処は立っていない。

しかし、指導員は結婚問題が現実化する年齢もこれからであると見ており、本人の意識と指導員の評価とは異なっている。

(5) サポートネットワークの課題

① 日常の生活規律について

現時点で念頭にあるのは、「彼氏のそばにいたい」ということだけである。家事については、「できません。家でも……お米といだりしてた……キャベツ切ったり……オムレツとシューマイとギョーザとラーメン」「今は私が帰ると、おじいちゃんが全部やっちゃうの……やるっていったのに、いいって、おじいちゃんがやっちゃうの、かわいいって……かわいがってもらうのも困る」と言いながらも、実は何も困ってはいない。

「おじいちゃんにはまだ、結婚するっていったないけど……あっちがいったん、結婚したいって……でも、わたしは何もいったないの……あっちがおかしいんだよ、あっちが……」というが、Cさんの思いこみが強いばかりである。

基本的な生活スキルを身につける目処がたてられていない状況であり、祖父母のもとへ帰宅すると、

身についたと評価した生活習慣が逆戻りしてしまうことを繰り返している。こうしたことを今後10年間続けていっても伸びがみられるのが疑問である、とする指導員の見通しは悲観的である。こうしたことからみて、指導者側には自立を援助してグループホームへの移行を達成するための課題は見えていないという。

② 経済的な自立について

祖父母からのこづかいが潤沢であるために、「今、使うお金があれば満足」という金銭感覚であり、労働対価として給料があるという見方はできていない。確かに就職して仕事をしているが、仕事の意味を理解しているわけではなく、こづかいのために働くという意識もない。

こうした背景には、経済活動については経験も関心もないことがあげられる。「毎日使えるこづかいがある」と、こづかいのやりくりの必要がない。こづかい帳の収支があうこと、1ヶ月単位で給料をやりくりできることは、自立への基礎的要件である。その他に銀行の役割や利用の仕方なども指導しているが、理解してはいない。ここでは、家庭の要求水準が高くないことに加えて、こづかいが潤沢なことが自立の阻害要因になっていることに注目しなければならない。家庭との連携が課題である。こうした課題をクリアできることと、「就労レベルⅡ」で安定できることとの関連は深く、目下、大きなターニングポイントに直面しているといえる。

③ 異性への関心について

「××君と……今はつきあってない……友だちにいわれたの……自分からやめようと思ってたの……彼女がいたの」「□□君……いつもあってる……紹介してくれて……友だちが……毎週はあわない……まだ恋人じゃない……まだ18だから……あっちの方が……年下だから」という彼氏に関する説明には、複数の固有名詞が登場するが、ただ道ですれちがった程度の友人であるという。

そういう友人との将来について、「ここ出て、青年寮出て、20才になったらつきあいたい、まだ先生が早いって、覚えないと……いろんなこと覚えないと、結婚つき合えないの……こづかいチェックとか……洗濯とか……タンス整理とか……タンス整理はいちばんきたくない（通勤寮の利用者の中で）……」と努力目標は掲げるが、グループホームに行くことは考えておらず、「……ここにいると無駄だから……うるさいから……男子が……喧嘩する……箒とか……とりあいっこしてる……」と目標の意味の理解はあいまいである。課題の提示を日常的に行う指導が求められている。

2-2 対人スキルが高いと誤解されるD氏の事例

(1) D氏のプロフィール

昭和44年の生まれで現在25歳の男性。重複障害はない。また、現在まで健康上の問題はない。知能検査の結果はIQ 62。話し方は流暢であるが、内容は空想的である。

母親は本人が8歳の時に家出をして行方不明、父親は15歳の時に再婚した。6人きょうだいの第3子。

継母は本人が22歳時に死亡した。その後、父親はドヤで暮らしている。姉と兄は怠学並びに非行等で教護院に措置されている。また、弟3人は養護施設に措置されている。

現在、バスで1時間の会社（従業員15人、障害者2人）に通勤している。正規に雇用されており、固定給制で月額10万円を得ている。居所は通勤寮。

（2）就労に関する経歴について

小学校・中学校の普通学級を卒業後、養護学校高等部に進学、学校の紹介で入職した。初職は従業員50人の金属メッキ業であったが、人間関係の問題で解雇された。その後、父親の縁故で鳶の仕事の手伝いをしていたが、ここでも人間関係の問題でやめている。ここまでの経歴は、「就労レベルⅢ」とみることができる。現在の職場は、通勤寮入所後、寮の利用者の就職先企業に依頼して採用がなかったもので、「就労レベルⅡ」である。

最初の仕事は、「自動車会社の部品を塗装して、塗装したやつを大きい箱と小さい箱に区別して、本社の部品をうちらが下請け会社で、取引みたいなので、4年間やっていたんだけど、お父さんが連絡なしに、社長とトラブルを起こしちゃってやめちゃったの」という内容であった。D氏によれば、「お父さん、車が好きだから、今まで3台目……お母さんの名前で買って、月々の支払はお父さんがやっていたの、ボクなんかの兄弟の貯金を勝手に使って、全部車にいれちゃったの……社長とトラブルを起こしたのは、給料が少ないのどうのこうのって……自分は少なくないと……給料もらう度にお父さんに（ボクが）全部わたしちゃうの……」ということになり、解雇にいたった人間関係の問題は主として父親に原因があるとD氏は受けとめている。

その後についた鳶の仕事は、父親の縁故であるが、給料は父親がピンハネしていたらしい。おこづかいは「月に千円しかもらってない」という。鳶職をやめたのは、「外国人がいっぱいいて言葉がわからない……カタカナ言葉で、喧嘩しちゃって、お父さんから2万円くらいもらって、友達んち行って来ってうそついて飛び出しちゃった」という経過であり、ここでも父親がらみの人間関係の問題に帰結する。現在、父親はドヤにおり、「ファミリーマートの2階に、新しい女の人と住んでるの」というが、没交渉である。

現在の職場では、父親とも縁が切れ、安定した職業生活を送る基盤ができているにもかかわらず、就労を通して「向上」したという評価が見えない状況である。通常、個人の昇進は採用要員を最下位部分からスタートさせ、長期雇用の中で内部昇進を決定する仕組みになっている。しかし、D氏の場合、1ヶ月目の評価は高く、16万円の初任給であったが、4ヶ月目にして13万円に下がり、入職から10ヶ月後の現在は10万円になっている。評価が下がった点としては、「挨拶ができない」「指示を聞かない」「ボケーッと立っている」「さっさと帰ってしまう」などを指摘されており、はじめはできていたので、職場では本人のやる気を疑うことになっている。こうした変化は、量的には生産量の問題として、質的には職業人としての振る舞いの問題として、観察・評価されている。教育訓練の効果が上がらず、逆に作用していることへの不満が会社側に起こるのは当然である。

「怒られてる、ボーッと立ってんじゃないって……」と上司に注意されているが、「ちゃんとやっています」という言葉と職場の要求との間のギャップは大きく、評価は危機的状況にある。「寮長先生から、3つの約束いわれてる。1つは、大きい声で返事する。2つは、上司や先輩に対して陰口を言わない。3つ目は、ボーッと立ってないで自分で仕事を見つけてその場で行動する」という説明は淀みがない。しかし、「がんばります」は言葉だけで、実際には「仕事を見つけようとしてんだけど、みつからない」ということであり、言葉の意味を理解していないといえる。

金があれば、「酒も好き、タバコも好き、パチンコも好き」であっても、なければ我慢するということが苦痛ではないとなると、金銭感覚を育てる指導の効果は期待できない。週単位のこづかいは目下、3000円であり、当初よりも減ってきているが、減ったことに痛痒を感じてはいないのが現状である。

IQの高さから見ると、理解できることを期待するわけであり、実際にもできていたことが、なぜできなくなったのかがわからないという。仕事が気に入らないのかと思って転職を勧めても、「あそこの会社はボクにあっています」という対応である。

これまでの転職の理由に「親が金を持って行ってしまふから続かなかった」ということをあげるが、会社側にクビを切る「チャンス」を与えただけであって、続かなかった理由は本人にあるというのが会社側の判断であろう。朝礼で「仕事をしているのに他のことを言いつけるのはおかしいと思います」という発言をするなど、発言はできるが内容が不適切であるという社会的スキルの偏りが認められる。指示に対する対応の仕方がわかっていないなどの問題があり、上司にはやる気があるというのではなく、依怙地になっている、ととられている。

表 4-5 仕事に対する満足の状況

	上司	給料	他者承認	仕事の責任	仕事に対する興味	進歩の機会	能力を試す	アイデアを生かす	会社の経営方針	会社の将来性	昇進の可能性	労働条件	通勤条件	休暇
製 造		○										○	○	○

D氏の仕事に対する満足の状況について、指導員の評価によれば、「給料」や「労働条件」「通勤条件」「休暇」には概ね満足しているようであるが、その他の「上司」や「他者承認」「仕事の責任」「仕事に対する興味」「進歩の機会」「能力を試す」「アイデアを生かす」「会社の経営方針」「会社の将来性」「昇進の可能性」には関心がないという。

(3) 居所に関する経歴について

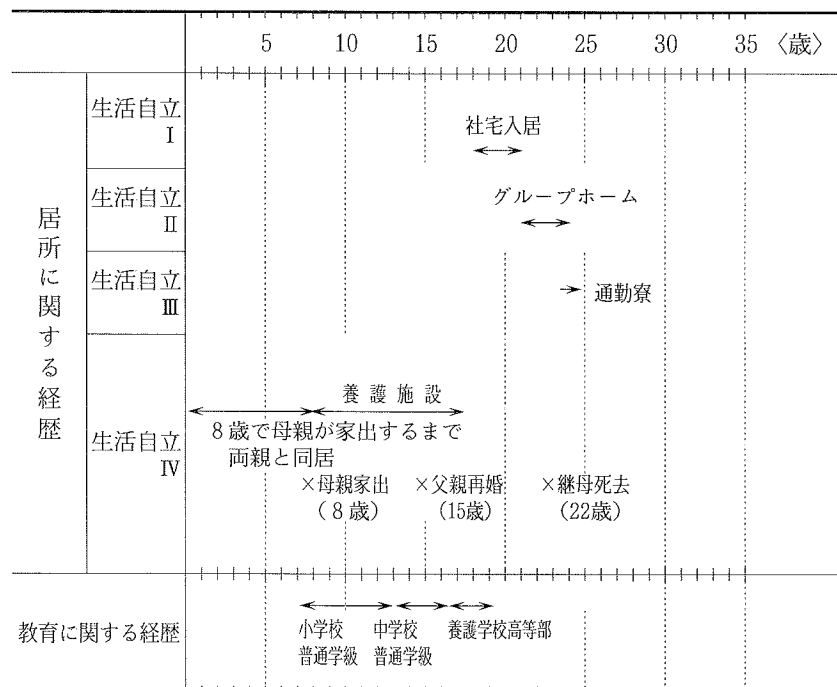
図中の矢印は在所した期間を示している。また、矢印の位置が高いほど自立的な生活であったことを示している。ここでは「社宅入居」が最も高く、家庭や養護施設における保護的環境は低い位置である。グループホームから通勤寮へと自立は頓挫したことを示している。

母親が8歳の時に家出をして行方不明になった時点で、養護施設に措置されている。「死んだお母さん（継母）じゃなくて別のお母さん（実母）がいたんだけど、面倒見切れないっていうから、ボクが小学校1年生の時、〇〇学園に来たの、高校まで」という説明である。この時期は、自立に必要なスキルを身につける段階であり、「生活自立Ⅳ」である。

最初の就職では社宅に入ったが、ここで一気に「生活自立Ⅰ」を要求されることになる。解雇されてからはグループホームで生活するようになり、「生活自立Ⅱ」に後退する。その後、生活面での問題から通勤寮で指導・援助を受けて自立をめざすよう指導され、さらに「生活自立Ⅲ」に後退した。

通勤寮を利用することになった経緯について、D氏によれば、「同じ養護学校の後輩の女の子と、今、18歳なんだけど……その子と会う度にその子が仕事をさぼっちゃって、その子の両親と学校の先生に見つかっちゃって、それが原因でグループホームに9月いっぱいまでいて、ここに来たの……近くのホテルで一泊して、朝方帰ってきて、12時くらいに両親と、学校の先生とグループホームの先生も一緒にいて、ばれちゃって……俺の世界とおまえの世界は生き方が違うから、ここできっぱり別れようって」という説明は、どこまでが現実でどこまでが夢想であるのかが判然としない。

表 4-5 D氏の経歴



継母と死別した衝撃も大きい。「お母さんがなくなる前に、言葉では言ってないんだけど、心の中で、ボク、結婚しないから、ずっとこのままでいるっていったの……もし、結婚して子どもを守って、当たり前のことなんだけれど、結婚するとお母さんを忘れるんじゃないかって、なくなる前に誓ったの」という言葉から、後輩の女の子とのつきあいを遊びとして結婚と区別しているのではないかと思われる。

記録がないために事実の確認はできてないが、D氏によれば、親戚が北海道（おじいさん）と福島（おじさん）にあり、「お母さん（継母）がなくなる前に、北海道のおじいちゃんが “もしよかったら、わしのところへ来て働らんか？” っていったんで、お金がたまったら北海道へ帰るの、うちの愛馬も待ってるし……おじいちゃんが一頭くれたの……おじいちゃんは牧場の馬主、東京ドーム2つくらい入るヘクターなの」ということでは自己顕示と所属欲求の強さを感じさせる。

（4）経歴が示唆すること

D氏の場合、実母が家出をしたこと、父親に生活並びに養育能力がなかったこと、継母に死別したこと、など家族関係の希薄さに起因する対人関係へのこだわりの影響が強い。話し方が流暢であることから、言語によるコミュニケーション能力は一見高いように受け取られるが、実際は内容が不適切である。ただし、そのことが他の能力も高いと誤解される原因になっている。

仕事をしていてよかったこととして、「初めて色を刷ったときに、一回で決まった」ことをあげる。達成の喜びは知っているといえるが、だからといって仕事に動機づけられているわけではない。したがって、「仕事中に話をする」「社員旅行が間近に迫ったときは、たまにミスる」などの例には事欠かない。スキーに行くために休暇をもらう手続きは、会社側が「こんな就労状況では許可できないから、1月末まで様子を見て決める」といっているのに対して、D氏は「行ってもいいって、1月の末に言うって」と受けとっていることからみると、決して言語理解が優れているわけではないことがわかる。

指導員の観察によれば、D氏はまだ子ども時代を引きずっており、働き盛りの時期でもない。基本的な生活習慣が身についた年齢は25歳であるが、これは通勤寮で指導を受けて実現したことであるという。精神的にまた経済的に自立する目処も、この仕事でやって行けるという目処も立っていない。職業人として一人前の年齢はこれからであると見られており、言葉では生活設計ができるように見えるが、本人の意識と指導員の評価とは異なっている。

（5）サポートネットワークの課題

① サバイバルについて

「生活自立Ⅰ」から「生活自立Ⅱ」、「生活自立Ⅲ」と順次後退している数少ない事例である。しかし、生き延びる力は確かに身につけている。口がたつ、如才ない、要領がいい、給料が減っても頓着しない、こづかいがなくともいい、イキがって“さまになる”に加えて、人は障害者にはみない、など、間違いなく風来坊でやって行ける人材であるといえる。小心であり、自分から人を動かすこともないなど、問題を起こす心配はないといえる。しかし、雇用関係への適応に困難が大きい。働く習慣や仕事をする態

度の習得など、課題が残されている。

② 将来展望について

「貯金して北海道へ、今、30万……毎月2万円ためて、今年中に50万円にする」というD氏の説明は一応はもっともらしい。しかし、こづかいに事欠く生活は、言行が一致していないことを実証する。「北海道に帰りたいし、愛馬も待っている、兄弟でおじいちゃんの後を継いで……お父さんの兄弟の従兄弟（父方の従兄弟？）も了解している」というが、いるのかどうか定かではない愛馬との再会は到底おぼつかないといわざるを得ない。

言葉だけきいていると理解して話していると誤解してしまう背景には、家族関係の希薄さに起因する対人関係へのこだわりがあると考えられる。状況判断や言語理解の能力は決して高いとはいえず、作業遂行能力も問題が多いことなど、能力が高いと一概にはいえないこと、しかし周囲は能力以上の期待をしていることから起こる問題があることを示唆している。

2-3 重複障害で疲労の著しいE氏の事例

(1) E氏のプロフィール

昭和42年の生まれで現在27歳の男性。重複障害として分裂病がある。知能検査の結果はIQ 46。話し方はゆっくりであるが、言語は明瞭である。言葉を繰り返しながら話をまとめていく傾向があり、主語と述語を揃えようとして単語がポツポツ並ぶ。母親の話になると過緊張ぎみで、身体がガクガク揺れることがある。

父親は本人11歳時に死亡している。母親は身体障害2級でほとんど寝たきりである。3人きょうだいの第3子。兄は中度の精神薄弱、姉は既婚で子どもが2人居るが、配偶者が病気がちなことから、家族の援助は期待できない。

現在、バスで1時間の会社（従業員20人、障害者1人）に通勤している。正規に雇用されており、日給月給制で月額9万円を得ている。障害基礎年金を得ているが、家族が自分たちの生活費としてあてにしている状況にある。居所は通勤寮。

(2) 就労に関する経歴について

小学校・中学校特殊学級に在籍、中学校は4年間で卒業している。16歳の時、学校の紹介で就職した。ここでは「就労レベルⅡ」を達成している。正規職員としての給料は月額80,000円であったが、仕事ができないという理由で雑役や庭掃除にまわされたことは不本意な出来事であり、「やる気をなくした」という。19歳時に分裂病を発病し退職した。

その間の事情を、「車の部品です、トランクとか……つくったり、はい……それで、ちょっと、ちょっと……病気になって……やめました……ちょっと生活のリズムが……ええ……仕事の方は……ちょっと……きついついていうか……やっぱり、暑い日とか寒い日とか一人で掃除をやらされるのが嫌だった……ええ、

ちょっと、疲れも、疲れも、だいぶ、うん、たまっし」と説明する。病気の原因は仕事が見つかったことにあるととらえており、2年間の入院と自宅療養の後、更生施設に移り、作業所での就労経験を経て現在の会社に再就職した。病気入院の後、「就労レベルⅣ」から再びスタートをする形になったが、援助を得て「就労レベルⅡ」に回復している。

現在の仕事は、職業安定所の紹介による。袋詰めの仕事はスピードを要求され、疲労が激しく、意欲はあっても、ついていけないという観察である。福祉的な就労の方が精神的にも身体的にも安定してできるのかもしれないが、経済的な問題があってE氏自身は「かんばらなくちゃ」と言っている。

「今、仕事をしてるのはあ、ええと、グリス、うん、油、ええ、チューブで、はい、ノズルに、はい、チューブをいれて、それで機械で、はい、チューブをとったりしてる仕事です……詰めるのはあ、詰めるのはあ、詰めるのはあ……機械で……ノズルで……チューブいれとか、チューブをとったりする仕事です」という説明である。「つかれないけど、よく、ときどき体調がね、ちょっと落としちゃって……もっと急いでやれとか、よく言われます……でも、自分は、自分は、あのあ、自分はコツコツと……ええ、」という状況をきくと、相当に無理をしていると判断できる。

E氏によれば、初職よりも現職の方が仕事をしやすいとしており、その理由として人間関係がよいことをあげている。初職で働きたくないと思ったことについて、「そういうのは1回あったけど、やっぱり、やっぱり、やっぱり、仕事しないと、仕事しないとあ、仕事しないと、……お金がないから……やっぱり、あきらめて……うん……自分がちゃんとまじめにやっていれば、でも、人に何を言われても……自分が、自分が、いいことしてれば、してれば、人は何も……」という言い方は、現在も人間関係の問題があることを示唆している。彼の場合、仕事に動機づけている要因は、経済的な問題であるとみることができる。給料は、「10万です……自分が働いた努力次第で、いい（仕方がない）かなと、うん」と納得しているようであるが、こづかいは「1万8千円です、自分で管理して……前は1万2千円だけど、足りないから……」と経済的には満足していない。

仕事の面ではノルマをこなせるようになってきているが疲労と裏腹の関係になっており、月末には疲労してパニックを起こすこと繰り返している。月に一度くらいは「疲労休み」をとりたいというのが本音である。転職はしたいけれど、不況でままならないという状況で、本人の希望が「すわってできる簡単な仕事」ということからみると、無理も限度に近いことがわかる。

更生施設にいたときの経験は、E氏に生活に関わる規範を強く意識させることになっている。「挨拶は大きな声できちんとしなければいけない」「生活のためには仕事をしなければいけない」など、教わったことを忠実に実行しようとする、精神的な疲労が増進する。「いってきます」「ただいま帰りました」「今日も一日頑張ってきました」という定型的な言葉は出るが、「今日は疲れています」という報告はできない。管理されやすい性格であり、設定された枠組みにしばられやすいことから、「はじめての日曜日は外出してもよい」という説明をきくと「外出しなければならぬ」と受けとめてしまうなど、状況判断が適切にできないという問題がある。

「働かないとこづかいはもらえない」という通勤寮の精神は、E氏自身の生活スタイルとも一致して

いる。しかし、「もう働きたくない」という本音は疲労が相当進んでいると判断できる。

E氏の仕事に対する満足の状況について、指導員の評価によれば、「給料」や「アイデアを生かす」「会社の経営方針」「会社の将来性」「昇進の可能性」「労働条件」「通勤条件」「休暇」には満足していないが、それ以外の「上司」や「他者承認」「仕事の責任」「仕事に対する興味」「進歩の機会」「能力を試す」といった項目には概ね満足しているという。

表 4-6 仕事に対する満足の状況

	上司	給料	他者承認	仕事の責任	仕事に対する興味	進歩の機会	能力を試す	アイデアを生かす	会社の経営方針	会社の将来性	昇進の可能性	労働条件	通勤条件	休暇
製造	○		○	○	○	○	○							

(3) 居所に関する経歴について

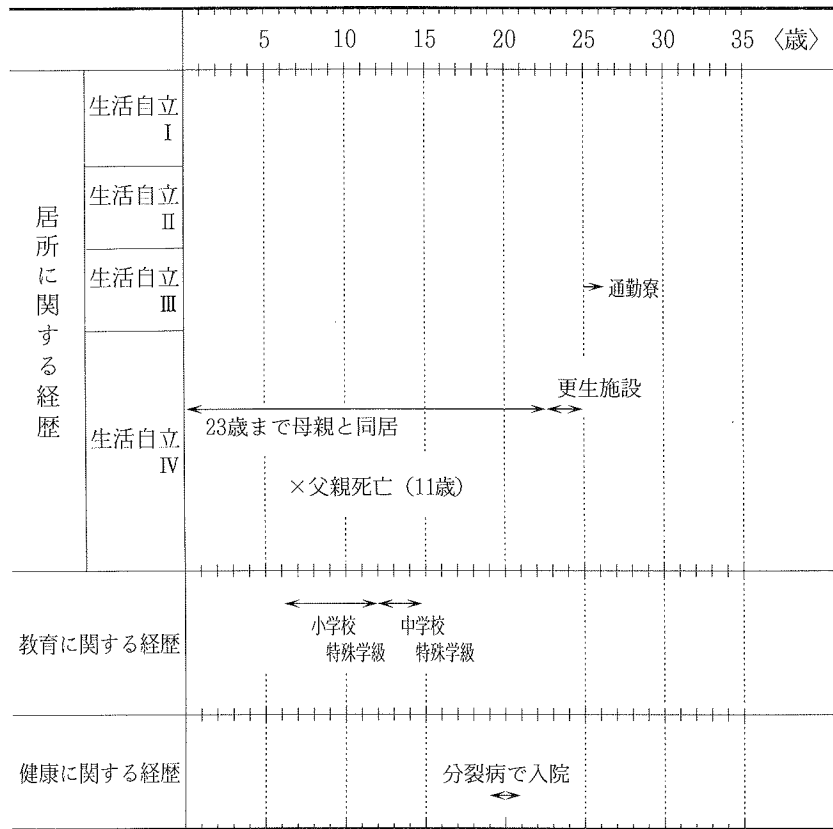
24歳までは家族と同居している。病状が安定してからは、職業訓練を受けることをめざして更生施設に入所し、家族と別居した。施設では、「ちゃんとね、一般就労めざしてやってただけけど、準備グループっていう訓練で、軽い障害の人が重い障害の人の面倒を見てて……」「仕事中はちゃんと、ちゃんとというか、他にも訓練受けてて社会のことをよく知っているから……、寮では人の面倒を見てね、薬を飲んだり、21人分の湯呑みを洗剤つけて洗ったり……ちょっと、頭が賢いところもあって、誠実さもあって……」と社会復帰への意欲は十分であったが、訓練コースに入ることはかなわなかった。この時期までが「生活自立Ⅳ」である。

その後、就職を契機に通勤寮に移行し、「生活自立Ⅲ」を達成した。家族がE氏の障害基礎年金をあてにしていることから、さらに自立をめざしてグループホームへの移行を志向することができない状況である。

図は自立の達成状況を示している。身の回りのことは自分でできるようになっており、生活自体には問題がない。月末にこづかいがなくなると、疲労に加えてパニックが深刻になる。グループホームでは、人数が少なく、時間のゆとりもあり、休息できることから、移行を実現することが望ましい。年金を本人に移管できれば、それが可能になると思われる。現在、年金の移管について、ワーカーが間に入って折衝していることはE氏も承知している。

しかし、家族への思い、特に、家に帰れば母親のおしめを替えるなど、母親への思いは強く、家族のしがらみは生活設計の障害であると同時に強迫観念に近いものとなって精神状態を圧迫している。

図 4-5 E氏の経歴



(4) 経歴が示唆すること

病気は服薬により安定しているが、非常に疲れ易く、薬の副作用があるものと思われる。しかし、その他の生活面では問題がなく、精神的な負担は家族への思いとの関連が深い。月末にはこづかいがなくなるために不満が増大するが、同時期に疲労が蓄積すると家族の生活を見なくてはならないという責任感を負いきれなくなり、パニックが起こる。このパニックは、病気によるものとも性格的なものともわかり難いという。決めたこと、決められたことに固着する傾向は、自分自身を縛りつける結果となっている。こうした背景には、これまでの生活では思うままに振る舞うことを許されなかった経験がうかがえる。

仕事に関しては、「今の悩みは、プレッシャーにおそ(わ)れやすいということ」であり、「プレッシャーは仕事のことが多い、なれないと失敗したり作業服汚したり……」「仕事を切り替えするときに、20数えてとまるボタンを押さないで運転のボタンを押したりする」「工夫してんのは、やっぱり、やっぱり、やっぱり、よくみてよく聞いてやった方がいいと思ってる」「頭にい、頭にい、頭にいれて、おくことはあ、おくことはあ、プレッシャーに(おそ)われないこと」という説明に顕著である。また、仕事以外では、「やっぱりい、やっぱり、人とね,」「プレッシャーにはならないけど、お母さんと話すときには思いがちょっとね……お母さんは耳遠いから……」という対人場面と家族の問題が現れる。

E氏の場合、身体は小さくはないが体力がなく、それが高じて自信を持てなくなっているという現実がある。注意されると落ち込んでしまうが、それを回避しようとして、経済的にゆとりがないにもかか

ならず、1日に1本500円の体力増進剤を買って飲む。1本100円のでは効かず、飲まない会社に行けないと思いきお傾向がある。日曜日の外出も「近所でいいや」と必要最低限の活動だけにして寝ている様子から、指導員は働き盛りの年齢を25歳から35歳と予測している。また、こうした結果として、引退の年齢は40歳と見積もられている。

指導員が大人らしくなったとみる年齢は25歳である。これは再就職をした年齢と対応しており、通勤寮入所が契機となっている。精神的に自立した年齢は23歳であるが、経済的な自立の年齢や職業人として一人前になる年齢はみえていない。また、この仕事でやって行けるという目処も立っていない。

(5) サポートネットワークの課題

① 家族との関係について

家族がE氏の障害基礎年金をあてにする状況は、家族がそれぞれ単独には経済的自立が困難な状況におかれていることを背景にしている。兄は精神薄弱者であり、在宅で就労しているが障害基礎年金の他に7～8万円の給料を得ている。姉の配偶者は病気がち（心身症）で失職中で、子どもは4人いるにもかかわらず、車を買ったりするなど、一家の柱として頼りない存在である。母親は寝たきりの年金生活者であるが、同居の家族のそれぞれに収入があることから、生活保護の対象とはなっていない。こうなると、家族への思いの厚いE氏は家族への仕送りを余儀なくされる。当然、経済的逼迫感は不安を増大させることになる。

E氏によれば「9人家族なんですよ、姪と甥と姉と兄と母とぼくと9人で、あとお姉さんの旦那さんと……ぼくはお母さんとお、お母さんとお、お母さんとお、お兄さんの面倒を見ないと……仕送りをしているの、お金はお姉さんにね、1日ね1万円、えええ、お姉さんに1万円、毎月でなくて」という説明はまさに責任感からくるものであろう。ほとんど没我の様相である。年金にしても、「27日で27（歳）だから、来月から5万が……いままで、年金の手続きが遅かったの……」ということで、家族のために心配しているといつて過言ではない。「グループホームに行って……お金がたまったら……お姉さんに……」という説明をしている。家族への思いと生活設計との割り切りができるかどうかにかかっている。

② 将来展望について

居所については、「ここを出る前に、何とかグループホームに……」という気持ちを持っている。しかし、資金については具体的な目処をたてているわけではなく、「やっぱり、たんないと思う」「うーん、自分で、思ったことは、10何万くらいかな」という状況である。

仕事について心配なことは「体調のこと……」であり、立ち仕事はきついという。勤務時間を聞くと「うん、8時20分から5時まで……お昼は12時から12時50分まで……休憩は、休憩は、10時と3時」と休憩時間まで一息に説明する。休憩時間を待ちきれない様子であり、「すわってできる仕事がいい」という希望が強いことと関連しているとみられる。しかし、そういう会社がおいそれとは見つかるわけもなく、「どこにあるかなって、思ってんだけど……でも、でもね、障害者使ってくれる会社があんまりな

いから」と、障害者に対する社会の処遇が冷たいことを明確に言葉で表現しようとする。「うん、職安に職安に、い（っ）ただけれど、い（っ）ただけれど、なかなか障害者使ってくれる会社なくて、それで、しょうがないから、今の会社で……辛抱して……」という。「最初はね、最初は変えようと思ったけど、でも、でも、障害者使ってくれる会社がないから、ちょっと、先生に言いづらくって……10万より、もうちょっと（欲しかった）」という説明からみると、疲労と経済的問題は解決の見込みの立たない大きな課題である。

③ 健康管理について

服薬により病状を安定させていることから、分裂病の予後としてはきわめて順調に職業生活に復帰していると見ることができる。さらに安定してくれば、薬が軽減し、現在のような極端な疲労感からは解放されるのかもしれない。

ドリンク剤を買うことについては、「変わんないけど、変わんないけど、変わんないけどお、あのお、ドリンクによって効果違うから……今は10本セットで1990円……毎朝、元気でるってゆう感じ」とは言うものの、一時的、気休めの的なものであるといえる。

いずれにしても、食事や睡眠を含めた健康管理が重要であり、家族のサポートが期待できない以上、グループホームへの移行が急務であるといえよう。

3. 解雇寸前の事例から

3-1 注意されると泣いてしまうFさんの事例

(1) Fさんのプロフィール

昭和49年の生まれで現在19歳の女性。重複障害はない。また、現在まで健康上の問題はない。知能検査の結果はIQ 69。話し方は幼児性が抜けず、語彙が少ないわけではないが返答は頷く“そぶり”のみの時が多い。

母親は本人2歳の時に行方不明になっている。2人きょうだいの第2子であるが、兄も音信不通である。父親は転々と職を変えており、生活は不安定である。

現在、電車・バスで1時間の会社（従業員15人、障害者3人）に通勤している。正規に雇用されており、固定給制で月額8万円を得ている。居所は通勤寮。

(2) 就労に関する経歴について

小学校・中学校特殊学級、養護学校高等部を卒業後、18歳で現在の会社に就職した。現在の仕事は、学校時代の実習先の一つである。初めは会話が少なく対人関係に問題があったが、指導員の援助を得て次第に改善されて採用にこぎつけた経緯がある。就職と同時に居所を児童施設から通勤寮に移行したために、仕事ばかりではなく仕事以外の生活面での変化が大きく、職場にも寮にもなかなか適応できなかつ

たという。

会社側とすれば、実習時に能力的には高いという見込みで採用しており、慣れてくれば当然のことながら、要求水準が上がる。これに対し、「なんで私のことをいじめるの」という対応をするFさんは、ノルマを達成することを要求する厳しい職場で、実習と就労とのギャップに苦慮することになる。現在は、クビ寸前でつながっているのが実状である。何かを注意すると「泣く」ことがしばしばであり、「今度（会社から）電話があったら（通勤寮に）引き取らなくてはならない」という。こういう状況ではあるが、雇用の状況からみると「就労レベルⅡ」ということになる。

仕事をしたいという意欲があるのであれば、就労しながら訓練していくことが可能である。しかし、意欲が確かなものであるとはいえず、福祉的就労を通して訓練する期間を設けた方がよいのかもしれないというのが指導員の見解である。

表 4-7 仕事に対する満足の状況

	上司	給料	他者承認	仕事の責任	仕事に対する興味	進歩の機会	能力を試す	アイデアを生かす	会社の経営方針	会社の将来性	昇進の可能性	労働条件	通勤条件	休暇
製造		○										○	○	○

Fさんの仕事に対する満足の状況について、指導員の評価によれば、「給料」や「労働条件」「通勤条件」「休暇」といった項目には概ね満足しているという。しかし、それ以外の「上司」や「他者承認」「仕事の責任」「仕事に対する興味」「進歩の機会」「能力を試す」「アイデアを生かす」「会社の経営方針」「会社の将来性」「昇進の可能性」といった仕事の仕方や仕事の意味、会社と自分との関係などについては、満足でないというよりも念頭がないといった方が適切であるといえる。

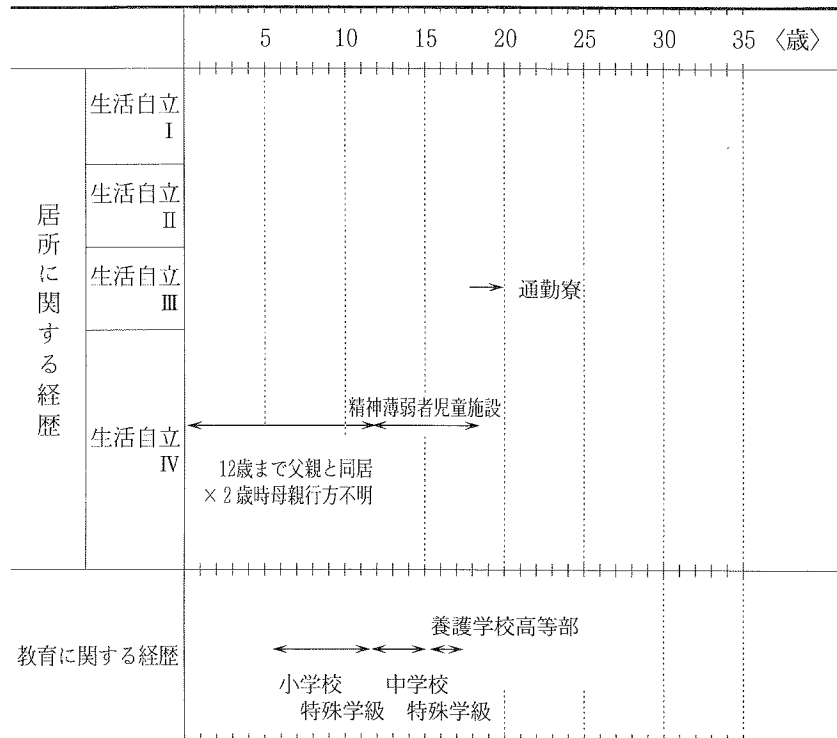
(3) 居所に関する経歴について

小学校時代は生活が不安定であったこと、問題行動（万引き）で補導されたこと、などで児童相談所により精神薄弱者児童施設に措置された。父親の仕事が、主として工事現場の賄い夫であったために転々としており、保護者としての監督能力が問題になったものである。

児童施設には職員が多く、Fさんの返事を待たずについ声をかけてしまうなどにより、特に問題には気づかなかつた。Fさんが“返事をしない”ことが多く、“暗い”だけでは、特に問題があるとは思われなかったらしい。一方、児童施設時代は、送別会の司会を担当するなど、人の上に立つことは好きだったという。しかし、命令されることは嫌いで、一つのことが終わった後で次のことを指示されると気に

くわないという態度は当時も観察されている。会話の相手が「うんうん」と聞いてくれればよいのであって、こうしたことから相手との関係が良好であるとは考えにくい。語彙は決して少なくないのであるが、相手に理解してもらうことを考えているわけではないといえる。この時期までは、「生活自立Ⅳ」であり、通勤寮に移行してからは「生活自立Ⅲ」を達成したとみられる。

図 4-6 Fさんの経歴



(4) 経歴が示唆すること

家庭で育った経験が希薄であるということの影響は大きい。2歳時に母親が家出をしているが、問題行動との関連が示唆される。一方、掃除、洗濯、その他の身の回りのことは全く問題がない。調理の経験はないが、教れば習得できるとみられる。しかし、知能は比較的高いにもかかわらず、能力を十分に発揮していない。その理由として、成就感や達成感、効力感を持っていないということが考えられる。

養護学校高等部の教員によれば、人間不信が強いが友人関係は良好であり、不信は大人に対するそれに特定されているものとみられるという。現在、友人に電話をかけるのは好きであるが、対職場、対職員の場合には返事ができず、考えを言えないことにも現われている。職場でもわからない時にどうすればよいのかを聞くことができない。

寮の人間関係は最近ではじめてだが、これも、思い通りになる（命令できる）人間を相手にする傾向があり、若い男の子では“自分がリーダーシップをとれると思う相手”，年配層では“自分よりもレベルの低い相手”に限られている。

自分のしたいことは、はっきりしており、そのために不満が多い。例えば、絵が好きであり、専門家

にみせると「いい絵で、色使いがいい」とほめられる。確かに、小さい絵ではきれいな絵をかくが、大きな絵では黒とか汚い色を使った絵を描く傾向がある。しかし、絵の学校にいつてみようかという勧めは、経済的な基盤の確保の見通しが立たないこともあって、まだ実現していない。

バザーのポスターを作成する際に、日時や場所、デザインの枠などが印刷された台紙に、ぬり絵をするばかりになっていたにもかかわらず、決められた枠を無視して、勝手に色をつけて周りの批判をよせつけない強引さを発揮したことがあるという。Fさんによれば、「(デザインなど) 関係ないもん」「そういうのは嫌いだもん」「厚い紙が好きだからかいたただけだもん」となる。しかしながら、彼女が自分自身を発揮する場面は、当面、描画だけであり、それ以外は“引きこもる”態勢である。自己表現できる場面を広げていく辛抱強い試みが必要であろう。

Fさんの場合、まだ「大人らしくなった」とはいいがたいものがあるという。この仕事でやって行けるという目処が立たないばかりか、働き盛りの始まりの年齢も見当がつかず、精神的にまた経済的に自立する年齢も予測できないでいる。

職業人として一人前とみられる年齢はこれからであり、能力の評価が高いにもかかわらず成果が上がっていないだけに、周囲のFさんへの期待が大きいといえよう。

(5) サポートネットワークの課題

① 経済的自立の課題

こづかいは週単位の管理から月単位の管理になったばかりであるが、月に15000円をやりくりしている。こづかい帳の記入もできるようになり、金銭管理に関してはレベルが高い。月単位でやりくりできることは、経済生活の自立への第一歩であるという見方からすれば、成長の跡をほめて励ますことができる場面であったという。今後、グループホーム生活を実現できるような経済的な課題の達成にあたって、具体的な目標を提示することが求められる。

② 大人への不信について

必要なこと以外は相談しないというのは、防衛的な対応であるとみることができる。例えば、日曜日の外出やこづかいの不足など、会話が必要な場面では、やむをえずではあっても意志を伝えることはできる。しかし、帰寮の報告などは「ただいま」といったなり、スーッと部屋に上がるなど、一日の報告はする気持ちにならなかった、あるいは、できなかったという状況が長く続いていた。

指導員が掲げた目標は「挨拶をする」「仕事が終わったら“終わりました”と言う」「ボケーッとつってないで次の指示を求める」「帰寮の報告では、2,3歩は部屋の中に入って、最低1分間は今日何をやったか話す」ということであった。指導員の評価では、徐々に目標達成の水準が上がってきているが、行動様式をパターン化する段階であり、大人に対する不信が解消される見通しがあるわけではない。自分に自信を持つという課題の達成が求められる。

③ 職場不適應について

能力は高いと評価されて採用されたが、Fさん自身も「あんなことは簡単だからできる」という気持

ちを持っている。ただ、「したくなかった」だけであると主張する。指導員が指摘する問題は、職場での人間関係が、受容的でない、親和的ではない、保護的ではない、教育的でない、などにあり、上司や同僚からは信頼するに足るだけの安心感を得ていないということになる。

ここには、会社側の配慮に問題があることも注意しておかなければならない。指導員側の「長い目をお願いします」という依頼に対し、「じゃあ、いらないよ」という対応は、従業員を会社の戦力として育てるといっても、一定の水準を超えた従業員でなければ困るという経営姿勢がみえるからである。どこの会社にもその会社なりの基準があるわけであるが、会社の接し方が違えば対人関係スキルの課題を達成して“クビ”の宣告を回避することも可能であるといえるからである。

このようにみると、現時点においてしばしば観察されている「注意されると“泣く”」という行動は、Fさんにとって自分自身を護る絶妙なスキルであるといえる。仕事の場面ばかりではなく、インタビューでも泣かれてしまい、直接話をきくことはできなかった経験をした。しかし、インタビューの打ち切りを告げると、次の場面ではもう笑顔を見せるなど、実に高度なスキルであるといえるのかもしれない。

Fさんにとっては、仕事に対する心構えや状況判断を習得することが、雇用関係の維持・継続に緊要の課題となっている。

3-2 職場で猫と遊ぶG氏の事例

(1) G氏のプロフィール

昭和49年の生まれで現在19歳の男性。その他の病歴にてんかんの治療がある。知能検査の結果はIQ 58。話し方はゆっくりで、ぼそぼそという口調は聞き取りにくい。一生懸命考えながら話す。

父親は生後すぐ、認知しないままに音信不通になっている。母親は中度の精神薄弱であり、42歳の現在、パートタイムで仕事をしている。4人きょうだいの第3子。異父姉、異父兄は住み込みで働いており、異父妹は小学生であるが、みな父親が異なる。現在、継父は母親と暮らしているが、G氏に対する愛情は薄いという。

現在、バスで1時間の会社（従業員30人、障害者1人）に通勤している。正規に雇用されており、固定給制で月額13万円を得ている。居所は通勤寮。

(2) 就労に関する経歴について

小学校は2年次に普通学級から特殊学級に転籍、中学校特殊学級、養護学校高等部を経て就職した。現在の仕事は、養護学校時代の実習先であり、会社側もG氏並びにG氏の障害をよく理解した上の採用であった。しかし、「実習の延長気分が抜けないのではないか」という注意を受けており、猫が入ってくると、30分でも1時間でも猫と遊んでしまうなど、継続雇用に明るい見通しはない。会社側も寛大に見てきたが、「これ以上はダメかもしれない」といわれるようになっていく。こうしたこととは対応しないかもしれないが、現時点の雇用条件からみると「就労レベルⅡ」である。

全般的に動作が緩慢で、遅刻が多く、着替えが遅い、タイムカードを押すとそれ以後の動作がさらに遅くなるなど、働く習慣が身につけていない点が問題視されている。朝は起こされないと起きない、バスに遅れたら歩いていく、仕事となるとやる気がでない、などは基本的な生活習慣のレベルでも問題になることである。10月のある日突然、職員の言葉掛けがなくても、朝は一人で起きるようになったという成長は認められているが、職場での態度はいっこうに改善していないという。

G氏によれば、現在の仕事は「車のエンジン、いろんなのあるけど、こんくらいのまあるいのでね、タイヤのあれのやつと、あと……、ボクは機械使わないけど、他の会社から持ってきたやつをでっかい缶から小さい箱に、あの、小さい板にその箱をのっけて、あの、何個か入れて、あの、入れ終わったらやってるところに、あの、同じ材料を持ってきて運んだり、あと、あの、油がなくなったときに油をもってって、んで、機械中に油をいれて、午後になると切り子だし、あと、掃除したり、モップでふいたり……」と流暢ではないが、手順は正確に説明する。しかし、仕事ぶりは必ずしも的確とはいえない。また、「切り子以外だったらほとんどできるけど、切り子は、まだ、ちょっと……上げるときに出せることは出せんだけど、最後、切り子のゴミを集めるとき、風がくるから（散らばっちゃって）イライラして箒をおっちゃったりして、壁の方にあてて折った、むかついて」という具合で、思うようにいかないことが多いようである。

「一番初めやってたときは、眠くなったり、やることがないと、そのまんま、手を動かさず、ぶらぶらして遊んでた」「このごろになると寝ることがそんなになくなった」「身体が辛い、一番辛いのが目が重たくなること」という説明は、てんかん治療のための服薬の副作用を思わせるが、実際には治療は終了しており、現在は薬物投与はない。疲れて眠くなるというが、「慣れないと、疲れて眠くなる、急に重いものを持つとか、誰も使っていない機械を拭いていると眠くなる」という説明で、単に作業疲労によるものとは考えにくい。「今の仕事はまだちょっと……今いっている会社は気に入らないっていか……初めて行ってやったときに、ちょっとやだなと思って……機械の油とか切り子出すときに、傷になったり、かゆくなったりするんで……」という不満があり、それを処理できないことを指摘する。

そこで意欲の問題が検討されることになるが、G氏は「今の会社よりももっと細かい部品をやりたい、冷蔵庫やカセットのデッキとか……やったことがないけど、学校で電気会社に見に行ったことがある……」ということであり、自分の能力については「あの……だいたい、みんなよりも先に半分ぐらいはできるかも……」という見込みで、転職の希望を持っている。

現在の給料は「今、あんま（り）、きちんとやってないから、7万7千879円」であり、仕事に対する態度が評価されていないという自覚はある。こうしたことの実態として、「仕事がないときにポケーッと立ってたり、切り子出すときに遅れたり……仕事がやる気なかったら帰れって」という。

G氏の仕事に対する満足の状況について、指導員の評価によれば、「上司」や「給料」「労働条件」「休暇」といった項目には概ね満足しているという。しかし、それ以外の「他者承認」「仕事の責任」「仕事に対する興味」「進歩の機会」「能力を試す」「アイデアを生かす」「会社の経営方針」「会社の将来性」「昇進の可能性」「通勤条件」といった、仕事の仕方や仕事の意味、会社と自分との関係などにつ

いては、満足でないというよりも念頭がないといった方が適切であるといえる。

表 4-8 仕事に対する満足の状況

	上司	給料	他者承認	仕事の責任	仕事に対する興味	進歩の機会	能力を試す	アイデアを生かす	会社の経営方針	会社の将来性	昇進の可能性	労働条件	通勤条件	休暇
製 造	○	○										○		○

仕事に対する態度に問題があることから、周囲の理解があったとしても現在の仕事を継続できないかもしれないと危惧されている。

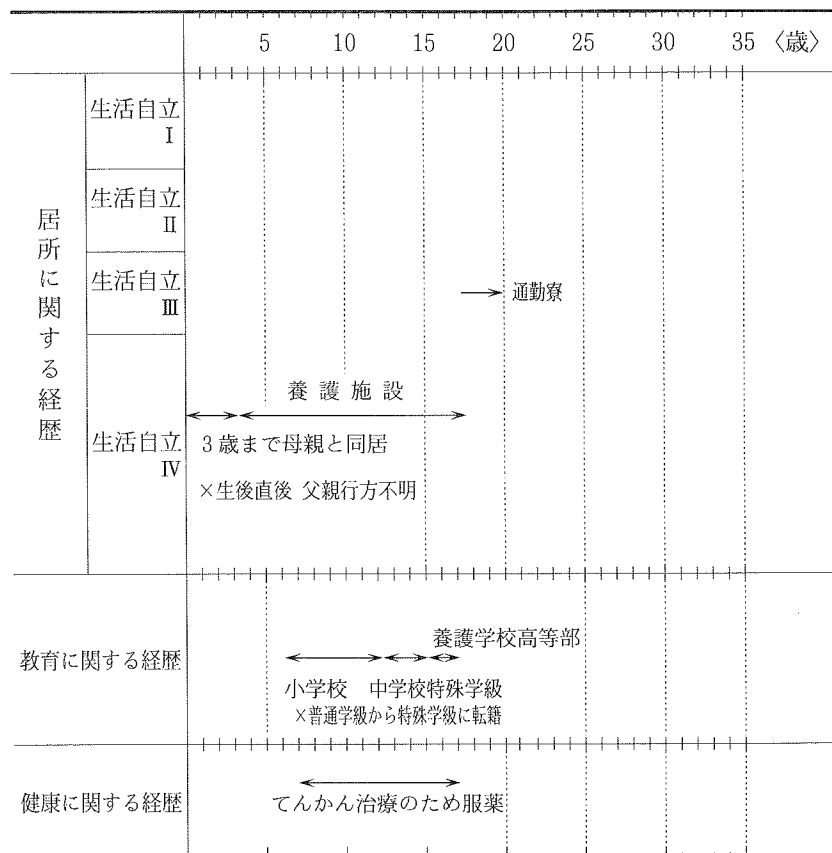
(3) 居所に関する経歴について

母親に中度の遅滞があり、子どもの所在並びに現況には関心がない様子であるという。G氏は3歳の時に養護施設に措置されており、この時期は「生活自立Ⅳ」である。就職を契機に通勤寮に移行しているが、通勤寮にも訪ねて来たことがないという状況である。

養護施設は健常者対象の施設であったために、指導に参加できず“落ちこぼれ”にされていたと見られる。通勤寮に来た時点では基本的な生活習慣は身につけておらず、例えば、洗濯ができない、布団は敷けるがシーツは敷けない、パジャマに着替えて寝る習慣はない（「パジャマはあったけど着たことがない、どうでもいい」という状況であった。習得する時期を逸しており、18歳になるまで通してきた習慣であるだけに、面倒なことに対しては、いまさらのように「何でそんなことをするんだよ」という反論をする事になる。通勤寮で「生活自立Ⅲ」を達成しているが、内容的には「生活自立Ⅳ」に近いのが現実である。

清潔感覚がなく、洗濯機の水がまっくろに汚れていても気にしない、風呂にはいっても洗わない、布団干しても「気持ちいい」という感覚がない、というよりも「何で干すんだよ、めんどくさい」という、低いレベルで固定してしまった生活感覚を修正する目処は、現在たっていない。G氏によれば、施設には「調理のお姉さんがいて、ご飯になる前に作ったりして……洗濯は自分でやる人もいるし、頼む人もいる、ぼくは頼んでないけど、全部お姉さんがやっちゃって、あの、ぼくはやってなかった」ということになる。困ったことがなかったのである。

図 4-7 G氏の経歴



(4) 経歴が示唆すること

G氏の場合、職業生活のための準備が組織的に援助されていたとはいえない。家庭が養育の機能を担えず、施設入所の措置がとられたことから、系統的・継続的な指導は行われなかったと見ることができよう。この事例では、就労意欲や働く習慣を身につけること、「貨幣」の価値を理解することといった課題への指導・援助が求められている。

職場では対応を猶予しているが、クビ寸前であることに変わりはない。全般に言語も動作も緩慢であり、職場でも生活の場でも周りを「イライラ」させることになる。考えをまとめなければならないことについては言葉が出てこない、何を言わなければならないのかを考えていると言葉が並べられない、1対1の会話ではさらにゆっくりになる、身構えると言葉が出ない、などは障害に起因するものであり、ここに“やる気”を持ち出しても改善は望めない。作業を習慣化して能率をあげることが必要であろう。

G氏の場合、大人らしくなったとはいえないという。この仕事でやって行けるという目処が立たないばかりか、働き盛りの始まりの年齢も見当がつかず、精神的にまた経済的に自立する年齢も予測できないでいる。

基本的な生活習慣を習得した場合、グループホームへの移行を展望することができるかもしれないという段階であり、職業人として一人前とみられる年齢はその後である。

ゆくゆくは「お兄さんは寿司屋に勤めている……そこに行きたい」というが、兄が住んでいる地域で

あるという他に、サッカーチームのある地域であるということも関連している。しかし、具体的な見通しがあるわけではない。

サッカーの話をするときだけ少し物言いがゆっくりでなくなることに示されるように、サッカーが好きであるという。学校時代にやっていたというが、現在、休日を待ちかねて練習するというわけではなく、緩慢な動きを見ているとどこにも「運動は得意」ということを裏づけるものがないが、通勤寮で問題を起こしたときの逃げ足は早くて追いつけなかったという観察はある。

7歳から16歳までてんかん治療を受けた病歴があるが、今は年1回の検査のみで、薬も使っていない。

(5) サポートネットワークの課題

① 基本的な生活習慣の確立について

洗濯にしても掃除にしても、また整容にしても、清潔感覚が希薄であるために面倒なことこの上ないけれども、やかましく言われるから言われたらやるという段階である。最近の成長は、指示される前に「さあて、洗濯でもしようかな」という言葉だけは一応出るようになったことであるが、すぐに仕事にとりかかるわけではない。また、洗濯機の使い方について前述したように、手続きとしてやるのであって、洗濯の意味がわかっているわけではないため、手続きを細分化してパターン化することが必要となっている。

② 生活時間管理について

通勤寮へ来て7ヶ月間は、毎朝職員が起こしていた。通勤バスに遅れると歩いて行くなど、時刻と時間の感覚が習得されていない段階であったといえる。最近では会社に遅刻することがなくなり、定時に出勤する行動は習得されたとみられている。しかし、寮ではできるようになったにもかかわらず、出勤後の着替えは相変わらず遅い。職場ですばやいのはタイムカードを押すまでであるという。

仕事以外の時間について、「これをしたい」というものが見つかっていない。G氏自身はスポーツが好きで「鍛えていることは鍛えているけど……サッカーもしてるし、バスケット、バドミントン」とはいうものの、「始めて5分たつと、みんなは汗かいてないけど、ぼくだけ汗かいて疲れちゃう」ということからみると、十分睡眠をとることなく運動したときのような反応であり、体力的な面で強化する必要があるのかもしれない。

休みの日には、「どこかへ行くとか、遊びに行くとか、紙にかいて……何時に帰るか書いて……えらい人、寮長先生とかにみせて……」と手続きについては身につけていることを示すが、何をするかといえば、テレビを見て過ごすことが日常であるという。

行動様式のパターン化は時間配分と関連させて行う必要があるだろう。

③ 健康管理について

てんかん発作についての病識はない。「倒れたことはない……学校で嫌なことがあると、すぐにカッときてガラスを割ったり、壁を壊したり……」という説明であり、G氏自身は無意識的に、モノに対する攻撃行動でフラストレーションを解消したものといえる。「今は薬を飲んでない」のであれば、「疲労

しやすい」「職場で眠ってしまう」などは、19歳という年齢にはふさわしくない身体的不活発さであるとみることができる。健康状況や睡眠のタイプの診断や管理についての検討が必要になるかもしれない。

④ 今後の展望について

G氏によれば、通勤寮を出てからの生活の夢は、「友達がいるし、どっかあいてるアパートかマンションを探して、一人で暮らして、そんでから、友達とサッカーのJリーグに入らないかって……」ということになる。その可能性についてアパートの家賃をとりあげて聞くと、「家賃は、ちょっと安くて6,700円か6,800円くらい、高くて89万円くらい」となり、金銭感覚も現実的ではないことがわかる。給料に対する希望は「多くてもらえたら、58万円」であり、これも現実性が希薄な数字である。ようやく、週単位でこづかいをやりくりできるかどうかという段階である。

時間感覚や清潔感覚について、問題はあっても援助を得て徐々に進歩しているという経過がある。年齢からみても、今後の成長の可能性が期待できる。こうしたことから、経験を積むことにより、一人前の職業人として認められることを望みたいというのが指導する側の願いである。

4. 家庭での疎外の影響が大きい事例

4-1 母親ときょうだい8人が知的ボーダーのHさんの事例

(1) Hさんのプロフィール

昭和47年の生まれで現在22歳の女性。重複障害はない。心因性の問題でヒステリー性のもうろう症状のために治療を受けた経験がある。知能検査の結果はIQ 44。話をすることが好きではなく、言葉を引き出すためには、じっくり時間をかける必要がある。

両親、きょうだいともに健在である。8人きょうだいの第4子。父親以外は母親を含めて9人に知的な遅れがある。両親が一日パチンコ屋で過ごすという生活をしており、子どもたちもパチンコ好きで兄1人と姉1人は在宅、姉1人と妹3人は施設入所、弟はHさんと同じ通勤寮の利用者である。

現在、徒歩10分の会社（従業員15人、障害者3人）に通勤している。正規に雇用されており、日給月給制で月額10万円を得ている。また、障害基礎年金も支給されている。居所は通勤寮。

(2) 就労に関する経歴について

小学校・中学校は普通学級に在籍した。中学校2年次からは精神薄弱児童施設に入所している。初職はクリーニング業であったが、パートタイムの仕事で給料が安く（半日出勤で月額25,000円）、8ヶ月でやめた経験がある。この時期は「就労レベルⅢ」である。その後、20歳で就職し、1年で通勤寮へ移行した。就職を契機に「就労レベルⅡ」を達成している。

Hさんによれば、「8時から5時まで、木曜が休みで、給料はあんまり決まっていない、9万とか11万とか……2年くらいたった」「仕事はまあまあ（おもしろい）……いまは（パンを）焼くだけ、機械

で焼く……慣れるまで1年くらいはお店には出ない、お店にはパートさんがいる」「結構つらいことが多い、失敗したとき、怒られる」という仕事である。経済的には、「おこづかいは欲しいんだけど……給料はこのくらいでいい」という感覚である。

通勤寮入寮後の生活指導を通して、金銭管理に目が向くようになってきているという。銀行の役割や利子の意味を理解する学習を通して、「預けとけば増える」けれども「働かなくてはならない」、などの理解が進んできた。一方、兄への崇拜の気持ちは強く、しかし、その兄には働く習慣がないだけに、影響は大きい。また、時間の感覚に問題があり、起きているのかどうか判然としない生活態度である。

仕事面では、入職当初、時計を見違えてパンをこがしたことがあるが、職場ではほとんど失敗はないようになっている。決められたことは“そつ”なくこなすようになっており、職場の評価は高い。

Hさんの仕事に対する満足の状況について、指導員の評価によれば、「アイデアを生かす」や「会社の経営方針」「会社の将来性」「昇進の可能性」「労働条件」「休暇」といった項目には満足できないが、それ以外の「上司」や「給料」「他者承認」「仕事の責任」「仕事に対する興味」「仕事に対する進歩の機会」「能力を試す」「通勤条件」といった仕事の仕方や仕事の意味、会社と自分との関係などについては、概ね満足しているという。

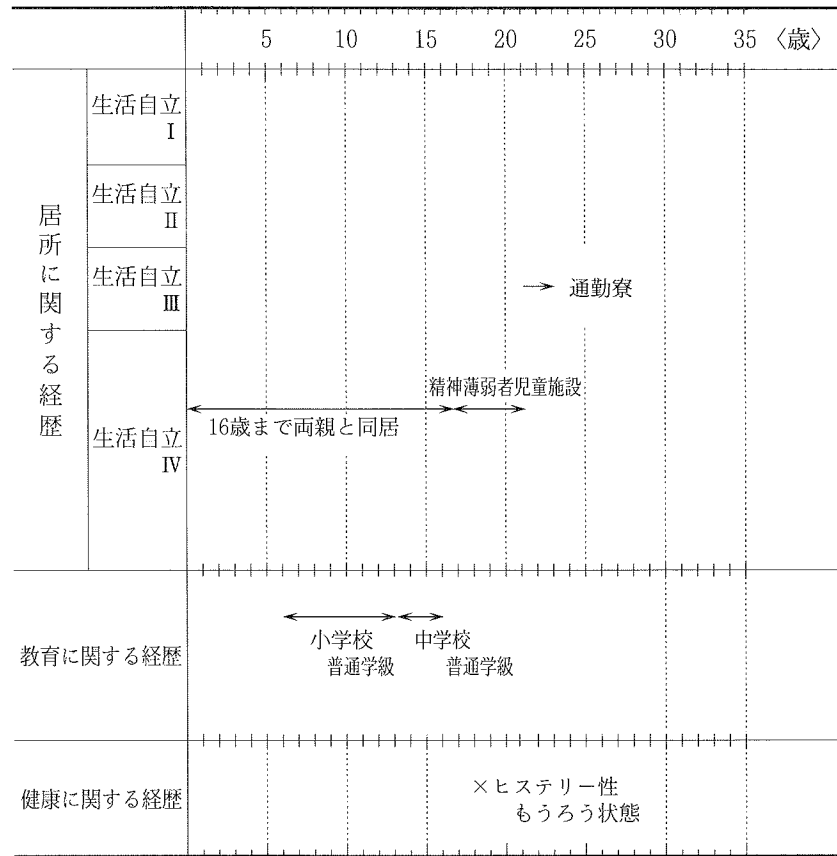
表 4-9 仕事に対する満足の状況

	上司	給料	他者承認	仕事の責任	仕事に対する興味	進歩の機会	能力を試す	アイデアを生かす	会社の経営方針	会社の将来性	昇進の可能性	労働条件	通勤条件	休暇
パン製造	○	○	○	○	○	○	○						○	

(3) 居所に関する経歴について

児童施設での訓練内容は、Hさんによれば「グループに別れて歩行訓練したり、作業もやっていた」であり、作業の内容としては縫い物や木工などがあったという。こうした経験は、作業に対する態度の育成に有効であったかもしれない。この時期は「生活自立IV」の段階であるが、着実に自立をめざしてきているといえよう。しかしながら、確かに職場での評価は高いが、寮の部屋の掃除に対し「なんで?」という対応をすることにみられるように、基本的な生活習慣の面では問題が多い。こうした生活面での問題の背景には、家庭生活の影響を無視できない。

図 4-8 Hさんの経歴



両親は子どもたちの養育どころではなく、自分自身の生活管理ができない。通勤寮を訪問したこともなく、子どもが正月（2年前）に通勤寮から帰宅しても食事も作らない、昼と夜の区別がなく夜も寝ない、という状態が続き、ヒステリー性のもうろう状態になって、服薬によって平静を取り戻すという出来事を経験している。そこで、昨年正月に帰宅することについては、ドクターストップがかかることになった。そのことについて、Hさんは「ストレスがたまりやすいから……勤めてから……」と多くを語ろうとはしない。しかし、2年前の出来事は覚えており、今年の帰宅希望については、1日だけ帰ることで納得している。本人が親を思うほど、親は子どものことを思っていないのであるが、Hさんの家族に対する愛着は強い。通勤寮では「生活自立Ⅲ」を達成していても帰宅をすると崩れてしまうというレベルである。

特に兄を崇拜しているのだが、仕事についておらず、ちゃらんぼらん生活であり、会えばこづかいをせびりとられてしまう状況である。本人が、自立生活の目処をたてられるように成長することを目標としても、兄を見ていると、それでもやっていけると思ってしまうところに問題があり、今後、検討の必要がある

（4）経歴が示唆すること

家庭における役割行動の経験のないHさんにしてみれば、生活していく上で必要な役割を分担するこ

とに対する関心は希薄である。基本的な生活習慣を身につける場面があったわけもない。これは、児童施設でも同様であった。したがって、「食堂の当番はやるが洗濯や掃除は嫌い」であるが、習慣化していないと見る方が適切である。Hさんは「家では自分でやっていた」ということからみると、面倒ではあるができないと困るという心境にはなっていると見える。しかし、本音は「朝、起きるのは最初はつらかった」ことが今でも続いている。

Hさんの場合、学校は普通学級を卒業しているが、「学校にはあんまり行っていない」ということから、ただ時期がきて卒業ただけであり、発達障害に対する適切な指導があったとは考えにくい。家庭でも、学校でも、系統的な指導・援助が行われていなかったといえる。

現時点で特に問題になっているのは、余暇時間の管理である。勤め先の関係で、休日が他の通勤寮利用者とは異なっており、友達づきあいのチャンスがないこともあって、暇を持って余すとテレビを見て過ごす。朝起きられないことは夜更かしと関係が深く、指導員の指示がないと一日中テレビと居眠りで過ごすという観察もある。たまたま、職場が近いことで、仕事に関する時間管理の問題は、今のところ顕在化していない。また、通勤寮にいれば仕事以外の生活時間の管理にも援助ができる。しかし、自宅に帰るとこうした時間管理の枠組みが全く崩れてしまうことになり、援助者のいない状況で生活することができない現状である。

Hさんの場合、指導員によれば、まだ「大人らしくなった」とみることができないという。しかし、一応の基本的な生活習慣が身についた年齢は20歳で、これは通勤寮入所後の援助によるものである。また、働き盛りの始まりの年齢は22歳とみられており、これから生活設計が検討されることを示唆している。精神的にまた経済的に自立する年齢や、この仕事でやって行けるという目処は立っていない。

職業人として一人前の年齢はこれからであるとみられているが、職場での評価が高いことが目標達成の可能性を支えている。

(5) サポートネットワークの課題

① 自立への展望

いずれは一人暮らしすることが希望である。その希望を実現するための前段階として、グループホームでの生活をやりくりできることが望まれる。ところが、グループホームへの移行については、「行きたいんですけど、あまり身の回りが……お料理とか、計算とか……ちょっとはできるんですけど」という自己評価で、課題が未達成であることを自覚している。施設にいたときは「……先生が（やってくれた）……」と、多くを語らない。しかし、大人の生活ではしなければならないことがあり、自分ではこれまでに経験しなかったことが多い、ということに気づいている。したがって、「家にいれば作ります」とはいうものの「どっかで練習しなくては……考えてはいるんですけど」というのが現状である。

指導員がみるところでは、問題はあっても徐々に進歩していることから、ゆくゆくはグループホームへの移行はかなえられそうである。援助があれば、自立を志向した生活はできるようになるだろうという見通しはたっている。しかし、経済性の発達からみて単身アパート生活は難しいものがあるという。

こづかいは月単位で管理しているが、外出が少なく、日用品を買うだけの生活では、ほとんど使わずに過ごしているので問題が起こらないという方が適切である。1万2千円のこづかいを「足りてるというより、たらしめている」というが、必要な品目について簡単な購買活動ができるという状況である。

② 家族との関係について

家族と住みたいという希望は強い。「一軒家じゃない、アパートだから（狭くて）……」という理由で現在は一緒には住めないのだと説明する。親しみが持てる関係は「家族しかいない」ということから、家族への思いは人一倍強い。これに対して、家族の側の思いはそっけないものがあるが、本人は理解していない。こうしたことから、自立への志向を支えることは、重要であるが難しい課題となっている。

③ 職業生活の維持・継続について

職場では言われたことを確実にこなすために評価は高く、知的能力に比して仕事面のレベルは高いものとみることができる。一応は安定しているが、生活時間の配分を見ると仕事中心であり、仕事以外の生活は暇つぶしの時間となっている。仕事よりも楽しいことは「……CD…ドリカム……」と考えながらやっと答がでる程度であり、周りの出来事に対する興味・関心は概して少ない。生活時間の充実に対する選択肢を増やすことも今後の課題となろう。

4-2 暴力的な環境で言葉を失ったI氏の事例

(1) I氏のプロフィール

昭和41年の生まれで現在28歳の男性。重複障害はない。知能検査の結果はIQ 52。

母親は本人が12歳の時に交通事故により死亡、父親は長くアルコール中毒であったが、本人が21歳の時に死亡している。2人きょうだいの第2子であるが、兄は本人が9歳の時に家を出ており、父親の葬儀で会ったときに初めて弟の障害を知ったという。父親の死後、7ヶ月ほどはあちこちの親戚に預けられ、結局は兄に引き取られることになった。兄は現在36歳、結婚して子どもが一人いる。

家庭環境の問題により一時言葉を失っていたが、現在は回復している。話し方はゆっくりで単語ごとに切れることが多いが、語彙は豊富である。

現在、電車・バスで1時間30分の会社（従業員30人、障害者1人）に通勤している。正規に雇用されており、固定給制で月額8万円を得ている。また、障害基礎年金も支給されている。居所はグループホーム。

(2) 就労に関する経歴について

小学校は普通学級に、中学校は特殊学級に在籍したが、母親の死後は学校を休みがちであったという。中学校卒業後、18歳で学校の実習先であった会社に就職するが、朝の支度を世話する者がいないために出社できず、解雇された。その後、材木屋にも勤めるが同様に解雇される。以降、在宅生活を送るが、父親がアルコール中毒で暴力をふるうために、おびえ続けていたという。この時期に言葉を失っている。

初職は、「紙がのっかってて、運んだり、外に干したりする」という仕事であった。勤めた期間は「……」であるが、夏休み前にはやめていたようである。やめた理由は、「ちょっとわからない」という説明であった。

現在の仕事は、材木の運搬と切断であり、シルバー（高齢者雇用）部門に配属されているので高齢者からかわいがられている。力があるので頼られており、仕事は速い。「カナダからコンテナで（運んだ）それをトレーラーで会社まできてそれをおろす……ツーバイフォー……伝票で選別……材木屋の仕事とにているけど、前はいろいろ種類があって……在来（の木材）は（木の）種類が多いから」と、考えながら言葉を選ぶために言葉が途切れる。今の仕事は好きであるが、不満もある。「……と、給料が少ない……とー、8万……9万円だけど健康保険に入っているから……」といい、12,3万円を希望する。給料の額面を仲間と比較すると、何年も行っているのに「俺の方がやすい」というのがその理由であるが、年金は兄が管理（貯金）していること、年金がなくてもグループホームで何とかやって行けることがわかったこと、などから、給料の額を理由にして転職を希望することはなくなっている。

「就労レベルⅣ」の準備段階から「就労レベルⅢ」で職を転々とした試行期を経て、現在、「就労レベルⅡ」で安定しているという経過をたどっている。

仕事をしていてよかったことについては回答がなかったが、「材木が現場行って、トラックにのっかって……家が建つ」という説明から、仕事に対する誇らしさを持っているとみることができる。

しかし、職場適応について、問題がなかった訳ではない。不適切な発言に対して、職場の反応は厳しい。休憩時間に性に対する興味を露骨な言葉で話題にすることが多く、「恥ずかしい」「おかしい」がわかっていない」というのが問題になった。二語文がせいぜいという時期であったために、言葉をそのまま受けとめられて誤解が深刻になったものであるが、二語文を乗り越えた後は、対人関係の問題はなくなっている。

I氏の仕事に対する満足の状況について、指導員の評価によれば、「給料」や「進歩の機会」「アイデアを生かす」「会社の経営方針」「昇進の可能性」「通勤条件」には満足できないが、それ以外の「上司」「他者承認」「仕事の責任」「仕事に対する興味」「能力を試す」「会社の将来性」「労働条件」「休暇」といった項目には概ね満足しているという。

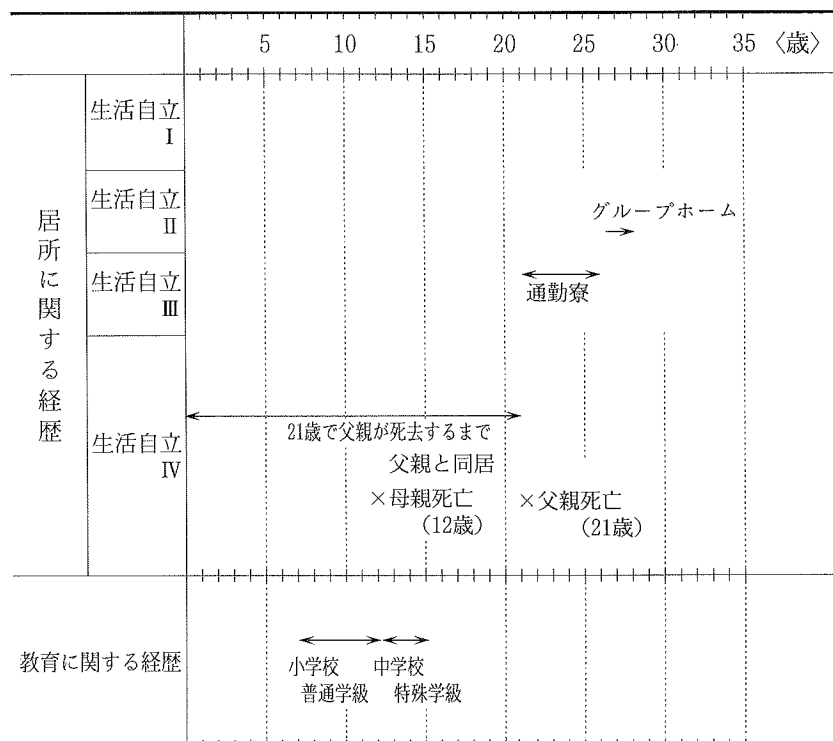
表 4-10 仕事に対する満足の状況

	上司	給料	他者承認	仕事の責任	仕事に対する興味	進歩の機会	能力を試す	アイデアを生かす	会社の経営方針	会社の将来性	昇進の可能性	労働条件	通勤条件	休暇
製材	○		○	○	○		○			○		○		○

(3) 居所に関する経歴について

父親の死まで、父親と同居していた。しかし、父親、祖父がともにアルコール中毒であり、同時に粗暴であったために、隅の方で小さくなっている生活であったという。母親の死後はさらにエスカレートしたが、保護する者がなく、一日中家に閉じ込もっていた。

図 4-9 I 氏の経歴



その後、親戚をたらい回しになり、兄が引き取ることになったが、兄夫婦の生活を“のぞき”見るようになって同居ができなくなった。兄自身、中学校を卒業した後、家出同然で家を離れていたため弟と生活したことがなく、愛情も薄い。「あの子(弟)といっても、つまないんだよ」という兄に対し、「優しくして欲しい」という気持ちから土産を買っていくが、「そんなものいらないよ」と応対され、姪をかわいがっても理解してもらえないなど、疎外される状況は変わっていない。

通勤寮入寮当時、二語文が出ない状態で、「ほしい」「かう」「ごはん」「たべたい」などがポツポツと出るだけであったという。「生活自立IV」のレベルであったとはいえ、自立に必要なスキルを身につけるといふ点からは遠い環境であったといえる。

図は自立の達成の状況を示している。通勤寮で「生活自立III」を達成し、その後、グループホームで「生活自立II」を達成している。グループホームでは特に問題は起こっていない。料理に興味があって、料理番組を見たり、本を買ってきて、世話人の人に「これ、作って」と頼むなど、生活感覚が出てきて安定している。

本人は会社の独身寮に入ることを希望しているが、職場では「考えていない」状況である。入職当初、

性に対する興味関心から、職場をとまどわせた経緯は前述したが、こうした背景により、女子寮があるので管理できかねるとするのが会社の判断である。したがって、独身寮に入るのであれば、雇用の継続自体を考え直して欲しいということになる。I氏としては「なぜ、職場が拒否しているのか」は納得はしていないが、理解している。現時点ではグループホームからアパートでの単身生活への移行の希望はない。

(4) 経歴が示唆すること

父親や祖父から疎外され、親戚からも兄からもじゃまにされる過程で、言葉を失っていった。通勤寮へ来てはじめて、情緒の安定を回復できる環境を得たといえる。スキンシップを求めていることはわかるが、ぶつかってくるので「なんだ？」と声をかけると、「あれ」とか「これ」という。こうした行動に加えて、後ろから抱え込むように近づくと、女子職員は怖がってしまうことになる。身体が大きいこともあって、気味が悪いことこの上ないというわけである。相手がIさんを怖がることで会話がストップしてしまうため、二語文がでる機会が少なくなっていたといえる。勤め先でも高齢者が危険を感じてしまうと、同様の悪循環になる。抱きつく、ちょっかいを出す、ということに周りがなれて対応できるようになり、2年間かかってようやく会話が出るようになった。

「恥ずかしい」がわかるようになるとともに、二語文が出て、「……行く」「……買う」と言うことが可能になったという。入寮後8年目の今年の正月に、学校時代の近所のおばさんに年賀状を出したところ、折り返し「あの子が手紙を書けるようになったんですか？」という電話が入るなど、当時を知る人からは信じられないほどの変化であったらしい。現在、トットツと話をしており、会話は成り立っている。勤め先でも、高齢者からは孫のような存在としてかわいがってもらえるようになっている。

兄との関係では、今でも話ができない。「ウー」「アー」という会話にならない緊張状態が続いている。義姉は女性であることから気安くちょっかいを出すのが、嫌がられるので、まだ理解には時間がかかるといえよう。

現在、計算能力には問題があるが、電卓を使うことはできるので、たいていの計算には困らない。したがって、こづかい帳は収支を合わせて記帳できる。また、日記は、二語文の時期でも簡単な文章を書いていた。学校に行っていれば、さらに上達していただろうと予測される。父親から受けた恐怖がどれほど発達を阻害したかと考えざるを得ない。

指導員がみるI氏の「大人らしくなった」年齢は21歳である。これは、仕事に対する意欲がでてきた年齢と対応している。また、基本的な生活習慣が身についた年齢並びに精神的に自立した年齢は24歳からであり、コミュニケーションの回復過程と対応している。これに対し、働き盛りの始まる年齢は20歳からであり、身体的に強靱で頼りにされることと関連している。

しかし、経済的に自立する年齢や職業人として一人前になる年齢はこれからであると見られており、いわれたことは素直に聞かすが、グループづくりも職員のバックアップがないとうまくできない、また、計画性がない点などは今後の課題となっている。

当面、グループホームでの生活自立が達成されていけば、良縁を得て結婚することも可能性として上がってくるものと思われる。次に転機があるとすれば、「結婚」であろう。

(5) サポートネットワークの課題

① 結婚願望について

先生から注意されていることは、「たまに……ちょっと」であり、してはいけないと注意されていることは、「あるか……」と、性に関する言動に対して注意されていることを十分に意識しているが、その内容を言語化することが不適切であることを承知している様子が見えてくる。

異性への関心は強く、「つきあってくれないか」とボソボソッと言う。このことが恐怖感を与えてしまうことになる。相手にしてみれば「こわいんです……」ということになり、積極性はあるが向こう見ずで、世間知らずであることが希望の実現を阻んでいる。指導員は、近い将来、いい人がいれば「お見合い」などを考えているという。「生活自立Ⅰ」の達成は、“出会い”にかかっているといえる。

② 余暇の過ごし方について

これまでの閉じた環境を見ると、いつ、どのように興味をひく場面があったのかが疑問であるが、趣味は音楽鑑賞であるという。通勤寮入寮後、「(ギター) 欲しい」「ロックいい」というので、「いつ聴いたの?」:「まだ、聴いていない」という問答があったという。CDを聴かせると、クラシックは「眠くなる」といい、ロックは「これ、すごい、いい」と反応するので、確かに興味があることは理解できたという。その後、ギターが欲しいということになり、「ひけるのか?」:「ひける」、「さわったことあるのか?」:「ない」、「音符見てもわかんないだろう?」:「わかんない」といった問答を繰り返した後、簡単な音符見てわかるようになったら買おうということにしたところ、バイエルを使って3ヶ月で目標を達成、おたまじゃくしを見ながら「この音はソド」と音をあてるようになって、ギターを買った経緯がある。ようやく二語文を脱する時期である。現在は、アンプを買い、ヘッド・ホーンで聴きながら、楽譜を見てひくのではないが自分なりに音を出す楽しみ方をしている。

こづかいの使い道は「必需品とか……ギターの……」であり、今、努力していることは「ギターテクニック」だというように、趣味のギターが中心である。その他、野球が好きであるがチームがなく、グループづくりは進んでいない。キャッチボールができる人数しかいないことが不満であるという。

人間関係の調整は、趣味の世界の拡大を左右する課題となっている。

③ 社会資源の利用について

「コンサートに……来月……3月23日……横須賀芸術劇場……スウェーデンの……S席が6500円、A席が6000円……」「去年は……ボランティアの人と……代々木のオリンピックプールで……ディープパープルのコンサートに……」というように、一人ではできないことでも、援助を求めて生活を楽しむことができるようになっている。

コンサートに行く時には、“ぴあ”で情報を収集し、チケットを買いに行く。年配層にはみられない余暇の過ごし方である。その際、会社を早退する手続きをし、ボランティアの援助を求めることが必要

になる。最近では、会社に対する申し出は自分自身で行い、またボランティアセンターに対する派遣依頼は指導員に頼むようになっており、社会資源の利用に関する援助があれば、行動範囲を広げることが可能になる例であるといえよう。

こづかいは足りないという気持ちを持っているが、給料は「4月に……上がる」という見込みであり、徐々に給料が上がっていくことが理解できるようになっている。

5. 就労による成長著しいJさんの事例

(1) Jさんのプロフィール

昭和46年の生まれで現在23歳の女性。重複障害はない。また、現在まで健康上の問題はない。知能検査の結果はIQ 47。話し方はあまり明瞭ではないが、ゆっくり考えて話す。また、同意語を繰り返しながらまとめたり、質問の言葉をそのまま引用して肯定するか、打ち消しながら否定するなど、言葉をかみしめて発語するので、非常に時間がかかる。

父親は本人15歳の時に事故死、母親は20歳の時に病気で死亡している。3人きょうだいの第2子。兄は重度精神薄弱で施設に入所している。また、弟は大学生である。

現在、バスで1時間の会社（従業員10人、障害者7人）に通勤している。正規に雇用されており、固定給制で月額11万円を得ている。また、障害基礎年金も支給されている。居所は通勤寮。

(2) 就労に関する経歴について

兄は重度精神薄弱者であったために、常時、介護が必要であり、弟は健常であったが子育てに手がかかる時期は、Jさんの養育は学校まかせになっていたという。こうした事情で、小学校は特殊学級を薦められるが、送り迎えができないことから普通学級に在籍した経緯がある。そこで、中学校になって一人でも通学ができるようになってから特殊学級に転籍している。

言葉が少なく、頑固で性格上の問題が指摘されていたために、一般企業への就職が見送られ、15歳から20歳までは作業所や授産所で就労をしていた。この時期は「就労レベルⅣ」である。

母親の死にともない、成人更生施設に入所した際、特例子会社として設立された現在の会社に採用された。現在の仕事は、失敗した包装を外して検査することであり、時間単位の出来高で生産性を測る点で目標が立てやすく、自信を持ってできる仕事になっている。就労レベルからみると、健常者と一緒の職場であることにこだわらない点で「就労レベルⅣ」とも「就労レベルⅡ」ともいえるが、ここでは生産性からみて「就労レベルⅡ」としておく。

Jさんによれば、現在の仕事は「チュウインガムの包装……工場から……できて……不良品の奴を……手でバラして……バラしたら……」と言葉が詰まるが、仕事ぶりは評価されており、「7人くらい（のトップ）」という自信がある。出来高はトップクラスであることは周囲も認めるところである。「仕事は

楽しくないけど、(職場の人と)話してて楽しい」「楽しいっていうより……楽しいっていうより……仕事はいいけど……細かい仕事の方が好き……」と不満がないわけではないことを主張する。

対人関係の問題では、性格的に相手とうまくやれない、かわいくない、暗い、などが指摘されていたが、仕事を通して成長の跡が顕著であることから、更生施設では能力や欲求を規制され、抑えられていたのではないかとみられている。九州にいる身内の人が会いに来て「こんなに変わったんですか?」と驚くなど、わずか 2～3年の間の大きな変化であったという。

Jさんの仕事に対する満足の状況について、指導員の評価によれば、「給料」や「アイデアを生かす」「会社の経営方針」「会社の将来性」「昇進の可能性」には満足できないが、それ以外の「上司」「他者承認」「仕事の責任」「仕事に対する興味」「進歩の機会」「能力を試す」「労働条件」「通勤条件」「休暇」といった項目には概ね満足しているという。

表 4-11 仕事に対する満足の状況

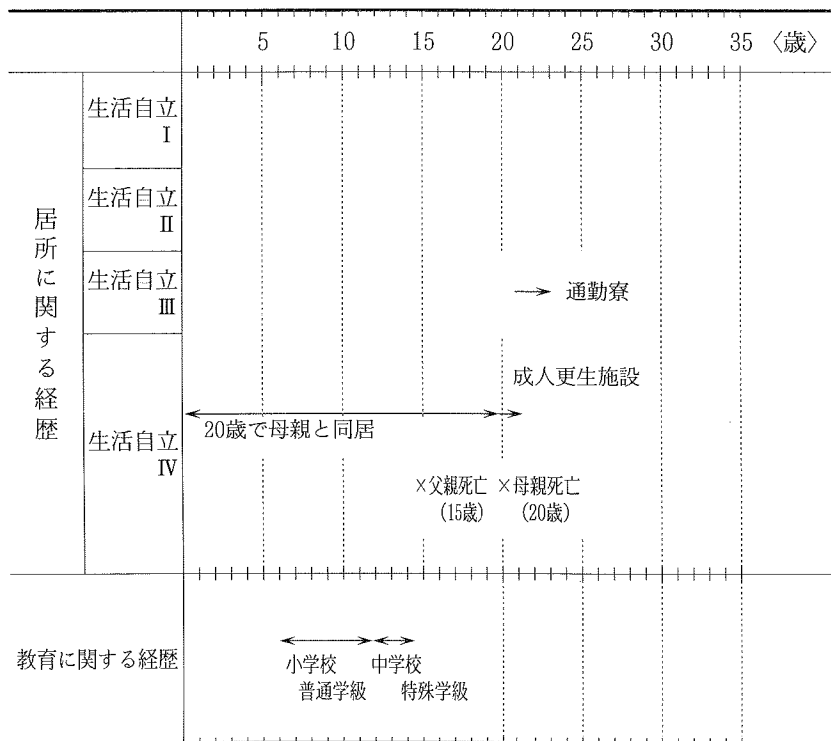
	上司	給料	他者承認	仕事の責任	仕事に対する興味	進歩の機会	能力を試す	アイデアを生かす	会社の経営方針	会社の将来性	昇進の可能性	労働条件	通勤条件	休暇
特例子会社	○		○	○	○	○	○					○	○	○

(3) 居所に関する経歴について

母親の死までは母親と弟と同居していた。母親の死を契機に成人更生施設に入所した。この時期までは「生活自立Ⅳ」であった。就職を機会に通勤寮へ移行し、「生活自立Ⅲ」を達成している。土曜日に帰宅し、大学生の弟と過ごし、日曜日に帰寮するという生活をしている。

帰宅は弟の生活の面倒を見るためであり、掃除、洗濯、食事等の家事をしている。Jさんによれば、「うん……きれいな方が好き……そう……たまに疲れることがある……きれいにしないと……やっぱり……どうしてもきれいにしないとだめなの……そう、気になっちゃう」「でもね、帰ってて……掃除してて……動きまわって……疲れちゃう……けど……」ということになる。

図 4-10 Jさんの経歴



(4) 経歴が示唆すること

Jさんの場合、対人的な関係性の悪さは、家庭でも学校でも放任されて育った経験によるものであるといえよう。また、職業生活のための準備が組織的に援助されていたとはいいがたい。家庭に養育機能が十分ではなかった背景からみて、家庭の中に一人前の大人に育てようとする指導があったとは考えにくい。頑固で暗い性格は、こうした背景を経て形成されたものと見ることができる。

指摘されている対人関係の問題は、見方を換えると、身を守る技能とみることができる。自分の領域に入って欲しくないという意識は強く、援助する人間がいないとうまくいかないことも多かったが、引いた方がいいと判断すれば引くことを理解してきているという。

15歳までは両親そろった家庭の姿を経験しており、事故で父親をなくすまでは、父親がいて母親がいて家族があるという生活であった。父親は外で仕事をして、母親は家族のためにつくすという役割は、Jさんの中に確固とした家庭像を築くことになったといえる。兄と弟に手がかかるために、自分が放任されなければならなかったことは理解しており、弟を世話することを通して、母親をみて学んだ家事の技能と年長者の務めをはたしているといえる。

通勤寮の一部の若い男女に結婚願望が強く、性的関心が高いことに対して、「バカじゃない？」という反応を示すのは、こうした背景によるものである。結婚や家庭が遊びではすまないことを経験的に知っているからであろう。

指導員によれば、Jさんが「大人らしくなった」とはいいがたいものがある。確かに、話ができるようになった（自分を表現できるようになった）けれども、周囲の人間と自分との関係を理解していない

という。例えば、自分に両親がいないことはわかっており、兄弟の現状もわかっているが、おばさんたちが身内であるという関係が理解できないために、守ってもらえるという気持ちが持てないでいる。両親が親戚づきあいをしていなかったためであると考えられるが、親の遺産や年金はおばさんが管理しており、こうした役割の人に対して敵意を持って接するのでは、人間関係は成り立たない。

これに対し、精神的に自立し、職業人として一人前になった年齢は23歳であり、働き盛りは22歳からである。つまり、仕事に就いて定着していく過程で自立を達成していくものと見られている。

(5) サポートネットワークの課題

① 経済的な自立について

こづかいは月単位で管理できるようになっている。また、年金があることも、それをおばさんが管理していることも理解している。

こうしたことから、将来を展望する際に、Jさん自身はグループホームへの移行に関して金銭面の不安を、「足りない、やっぱり年金とか……おばさんが預かって管理してる……近くじゃなくて……福岡にいる……」と説明する。しかし、おばさんに親近感はない。現実には、「おばさんとは行ったり来たりしていない」「(おばさんは)月に1回は様子見に来る」という関係ではあるが、相談する人の中の一人として受け入れている。「そう……でも、今はここを出ることを考えてる」という希望を実現するためには、おばさんとの関係を良好に保つ技能の向上が必要である。

② 弟との関係

大学生の弟の世話には愚痴をこぼすことが多い。「掃除は1週間していない」「食事の片付けもしていない」などを指摘する。母親の手伝いをしながら身につけた家事の技能があるため、環境を選べば自立して生活していくことは可能である。その意味では、健常の弟の方が自立していないといえる。現時点では、指導員が間に入り、弟が姉に世話してもらうことの対価を支払うようにJさんを援助しているという。「オレ、こづかいへちまうじゃないか」という弟であるが、姉の世話になっている以上、やむをえないという気持ちになっている。こうした関係を通して家族関係を実感している現状ではあるが、Jさんの弟の自立ひいては成人期のスタートとともに、関係が変わる時期が近い将来に予測できる。Jさんの生活自立と成人期のスタートを展望できるかどうかは課題となろう。

③ 自立の課題

グループホームへの移行の話は出ているが、アドバイスをする人間がいないと自分から相手にとけ込んでいくことがないために、同室者は誰でもいいという訳にいかない。現実には寮長以外の職員との関係ができるまでに、1年がかかっている。面倒見のいい年上の人はずらわしく、つかず離れず、関心を持たない関係がいちばんいいとなると人選に苦労することになる。こうしたことから、現時点では、さらに生活自立のレベルの高い単身のアパート生活を展望することは困難である。

自立への課題を達成していく上で、金銭管理の技能を身につけることが必要となる。こづかいは潤沢ではないために、月々の決められた分については毎日の必需品に使うものとし、新規に必要な趣味

の経費などはこづかい以外から出すように、指導員に交渉する技能を身につけてきている。例えばテニススクールの会費はこづかい以外から出すことにするなど、使い過ぎの問題はあってもやりくり工夫するようになっている。とはいうものの、給料は限られており、必要経費の費目を理解して仕分けることはまだできないなど、やりくりが完全にできるまでにはいたっていない。目下、テニスとコンサートに経費がかかりすぎており、当面の援助の課題である。

第3節 若年者の職業経歴が示唆すること

—— 生活自立に関する評価の重要性について ——

第2節では、職業経歴並びに生活自立の評価の枠組みに基づき、若年者10例を対象として経歴の検討を行った。

職業経歴を分析する際の区分は年配者と同様の基準とした。つまり、①：準備期、②：試行期、③：安定期、④：下降期、にわけて職業適応の状況を分類した。ここでは、各時期を次のように区分した。

- ① 準備期：家業の手伝いや施設での実習、施設の園外実習など、仕事に適応する準備の段階
- ② 試行期：比較的短い期間（概ね3年未満）でいくつかの仕事を転々とする段階
- ③ 安定期：概ね3年以上の長期にわたって仕事に定着する段階
- ④ 下降期：引退へのソフトランディングの段階

典型は、①→②→③→④の順序で職業生活が展開するタイプであった。若年者の事例は、この典型をたどっている途上にある。安定期まで到達している例が3例、試行期にある例が6例、試行期を中断している例が1例で、概ね試行期にある。

(1) 安定期にいたる：A氏

職業適応の状況	準備	安定
就労レベルの変化	IV	I

安定期にいたる：Jさん

職業適応の状況	準備	安定
就労レベルの変化	IV	II

安定期にいたる：I氏

職業適応の状況	準備	試行	安定
就労レベルの変化	Ⅲ	Ⅱ	Ⅱ

(2) 試行期にある：Bさん, G氏, Fさん

職業適応の状況	準備	試行
就労レベルの変化	Ⅳ	Ⅱ

試行期にある：Cさん, D氏, Hさん

職業適応の状況	試行
就労レベルの変化	Ⅲ→Ⅱ

(3) 中断して試行期にある：E氏

職業適応の状況	試行	準備	試行
就労レベルの変化	Ⅱ	Ⅳ	Ⅱ

安定期に入っている3例の内、2例はグループホームにおける「生活自立Ⅱ」を達成しており、1例は「生活自立Ⅱ」をめざして生活している段階である。こうしたことからみて、概ね安定期を維持継続できる条件が整っているとみることができる。

一方、試行期にある人が安定期への移行を展望できるかどうかという点についてみると、Fさん、G氏、Hさんについては、居所が通勤寮であっても内容的にみて「生活自立Ⅳ」のレベルであるなどが観察されている。また、D氏は、「生活自立Ⅰ」から逆に「生活自立Ⅱ」、「生活自立Ⅲ」と下降してきている。さらに、Bさん、Cさんについては、今後の生活自立のレベルが異性に関する問題を解決できるかどうかにかかっているということから、いずれも、当面、試行期を継続するものとみられる。

さらに、試行期を病気で中断しているE氏は、健康管理の如何によるという点で、やはり安定期を展望する条件は整っていない。

10例の検討からも、年配者のパターン分析から明らかになったことが確認された。

- (1) 生活自立のレベルの達成状況は就労レベルの達成状況と関連する。
- (2) 生活自立を支援する体制が整っていれば、早期に高い就労レベルを達成できる。
- (3) 生活自立と就労レベルの達成、並びに維持には、日常的な援助体制が必要である。

こうしたことからみて、職業経験の短い若年者であっても、職歴評価の枠組みは有効な知見を提供するものであり、生活自立の評価とあわせて評価することが重要であることが示唆された。